

第68図 出土土器実測図

と思われる。

c 縄文 69は口縁端に刺突、胴部は縄文のものである。

6類 平椿式土器類 くの字に開く口縁と沈線の組合せ 70~76

70は縄文施文、71、72は短い沈線のものである。

73、74はヘラ状工具による沈線と連点文の組合せ、75は櫛状施文具による沈線と連点文の組合せ、76は縦位の擦糸と沈線の組合せである。

7類 塞ノ神式土器類 77

77は沈線間に擦糸を充填し連点文を加える。

## 8 その他の土器

78は口縁部に段を付けた文様帶を作り、口唇部に大きな押圧を入れ下部に貝殻腹縁の押引状の刺突を加える。

79は貝殻腹縁の押引状の刺突を加える。

80は櫛状施文具により渦状の文様を施す。

81、82は貝殻条痕を荒くナデ消することで横、縦の文様風にしている。

83、84は貝殻腹縁の刺突で、83は格子状である。

85、86は網代底である。

## B. 石器（第71図）

石器は、石鎌、石匙、石斧等が出土している。

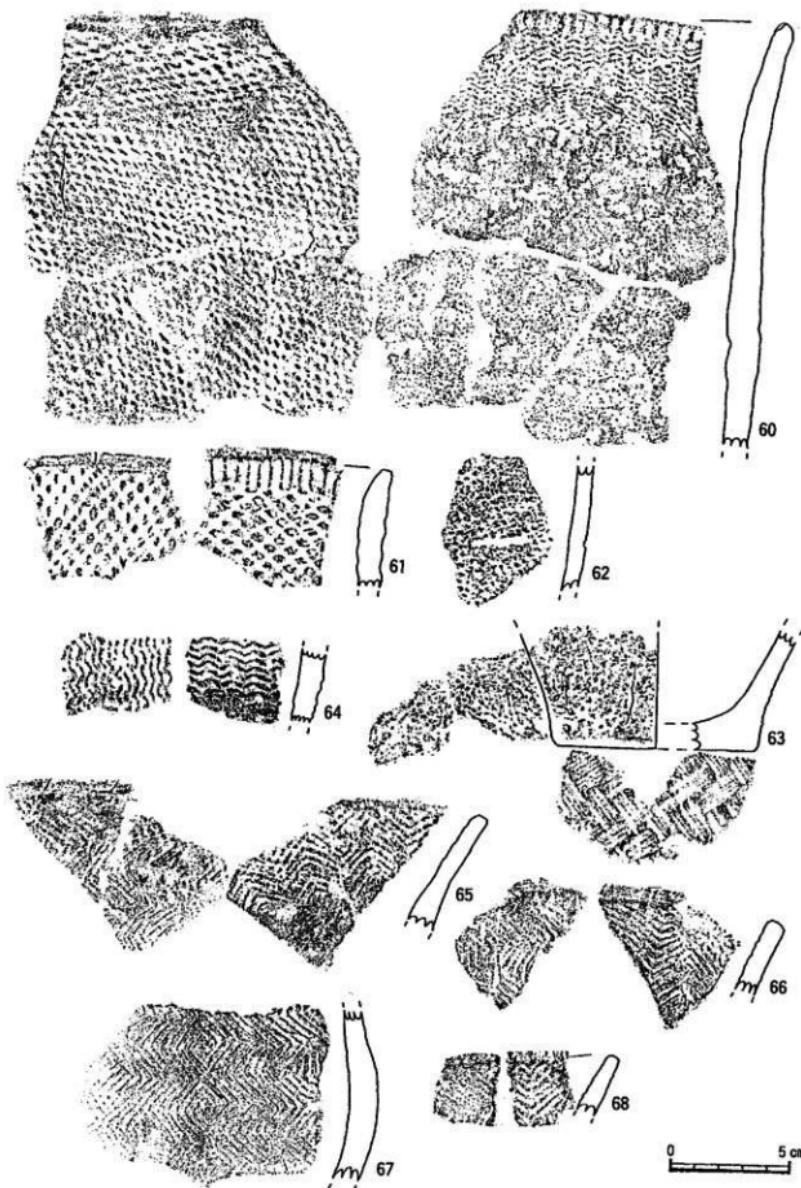
87~118は石鎌でグリッド全体から出土し、使用石材は、黒曜石、チャート、頁岩等多種である。

平基鎌 89、90を除き凹基鎌であり、所謂トロトロ石器は見られない。109、113、114は長二等辺三角形の異形石鎌である。

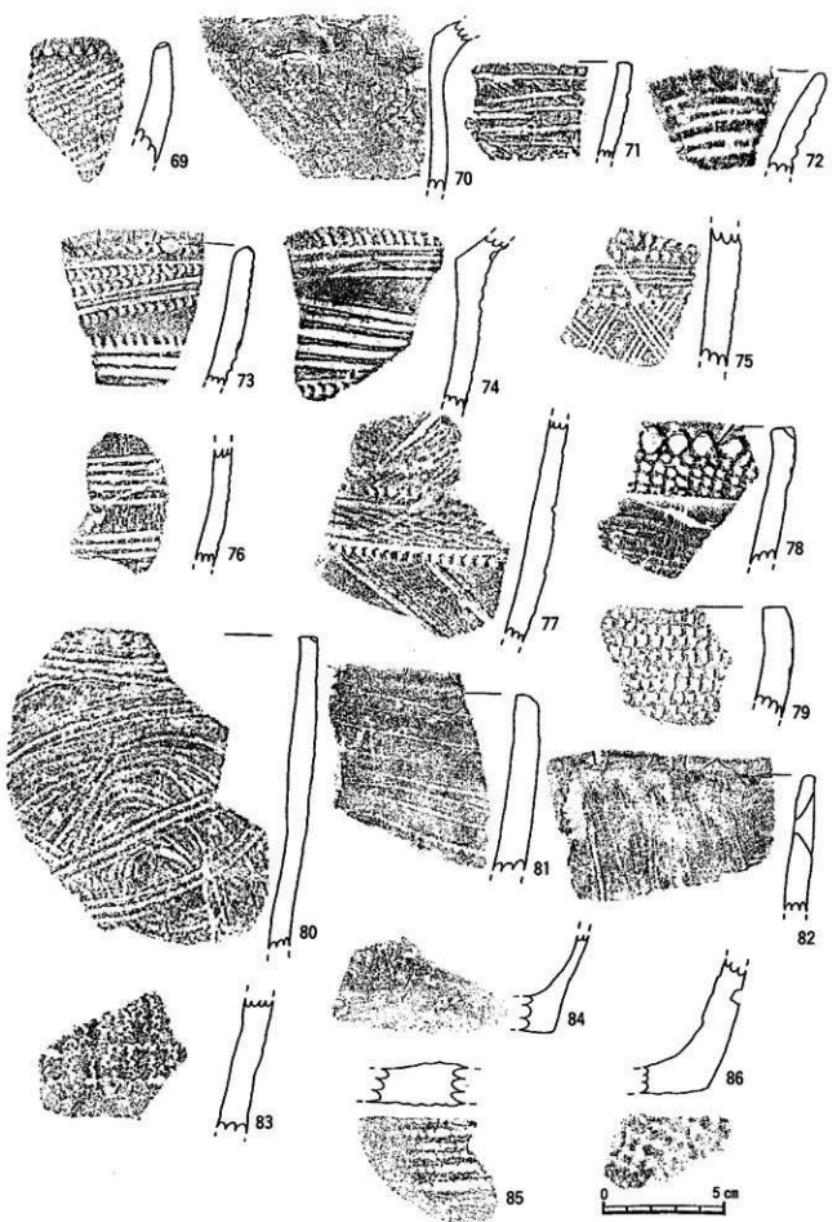
119は縦型石匙であり、刃部反対辺は厚みを残している。

120、121は小型の磨製石斧で120は刃部、121は基部近くである。

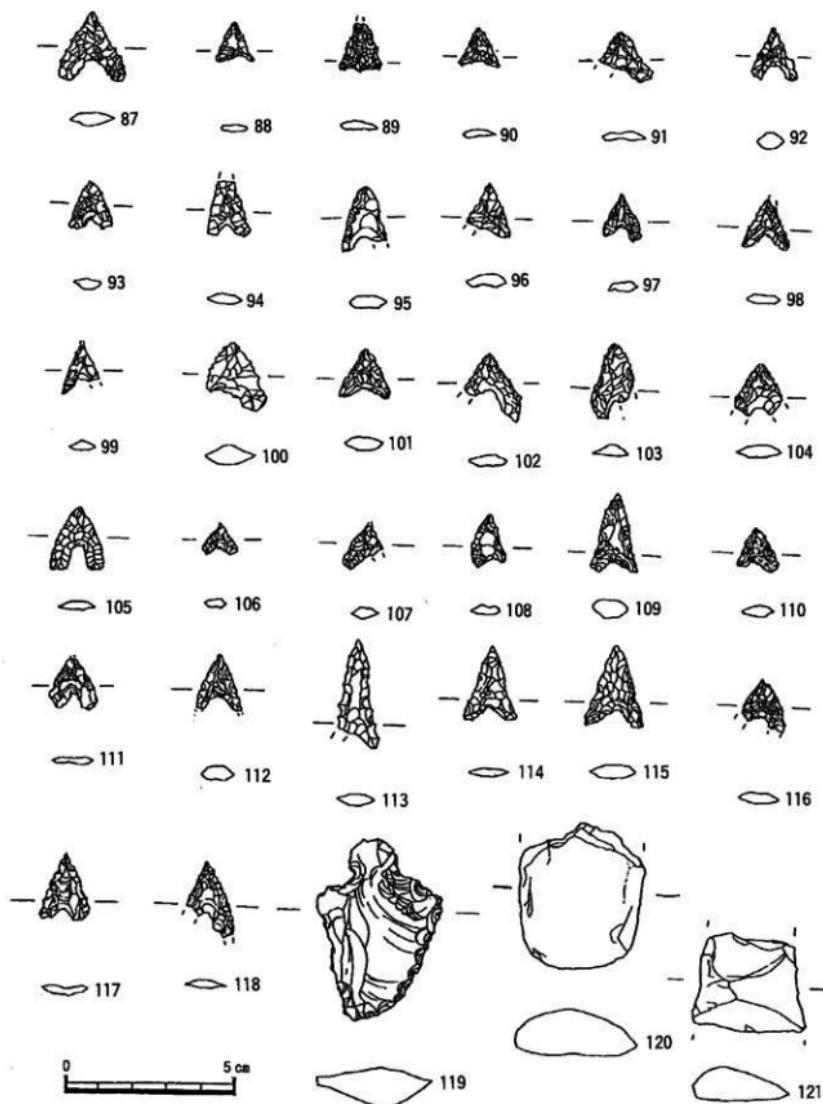
その他、剥片、チップ等は出土しているが、掲載はしていない。



第69図 出土土器実測図

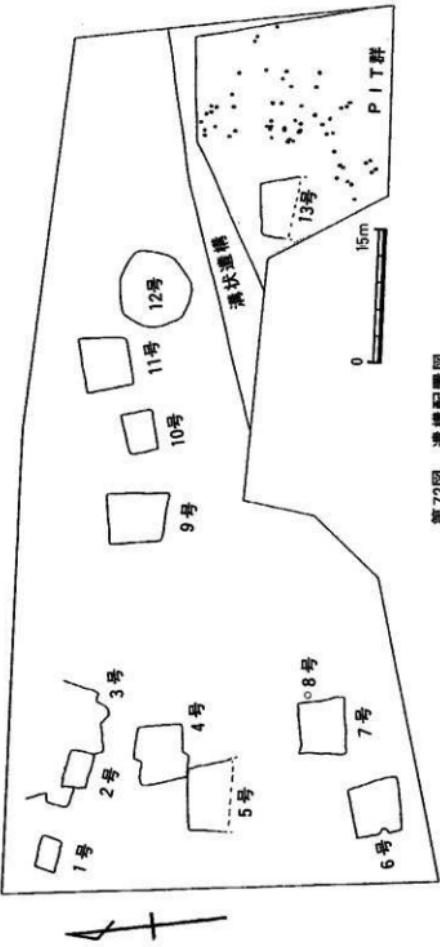


第70図 出土土器実測図



第71図 出土石器実測図

第72图 造桥配置图



#### 4. 弥生時代の遺構と遺物

##### 1) 遺構（第72図）

弥生時代の遺構としては、竪穴住居が11軒、周溝状遺構1基、土器窯が1基検出された。

##### 1号竪穴住居（第73図）

3.6m×2.4mの長方形の竪穴住居で深さ約20cmを残し、短軸が磁北方向からかなり東に振っている。床面の中央部に赤変した部分があり、炉の跡と思われる。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され、壺が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

##### 2号竪穴住居（第73図）

5.6m×4.6mの台形の竪穴住居で深さ約40cmを残し、短軸が磁北方向からやや東に振っている。

遺物は、床面から浮いた形で壺と甕が出土し、床面で甕が出土した。

柱穴は短辺の中央でそれぞれ1箇所検出された。

##### 3号周溝状遺構（第74図）

直径3.5m半円形の周溝状遺構で深さ約30cmを残すが、北半分は谷落ちのため不明である。遺構上部に流れ込みの層が見られた。

遺物、床面から浮いた形で小片が出土したのみで、流れ込みが殆どである。

土坑、柱穴は検出出来なかった。

##### 4号竪穴住居（第74図）

6.6m×5.2mの方形の竪穴住居で深さ約20cmを残し、短軸が磁北方向からやや東に振っている。北西部に間仕切の部分が1箇所見られる、変形の間仕切住居である。

遺物は、床面から浮いた形で甕の小片が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

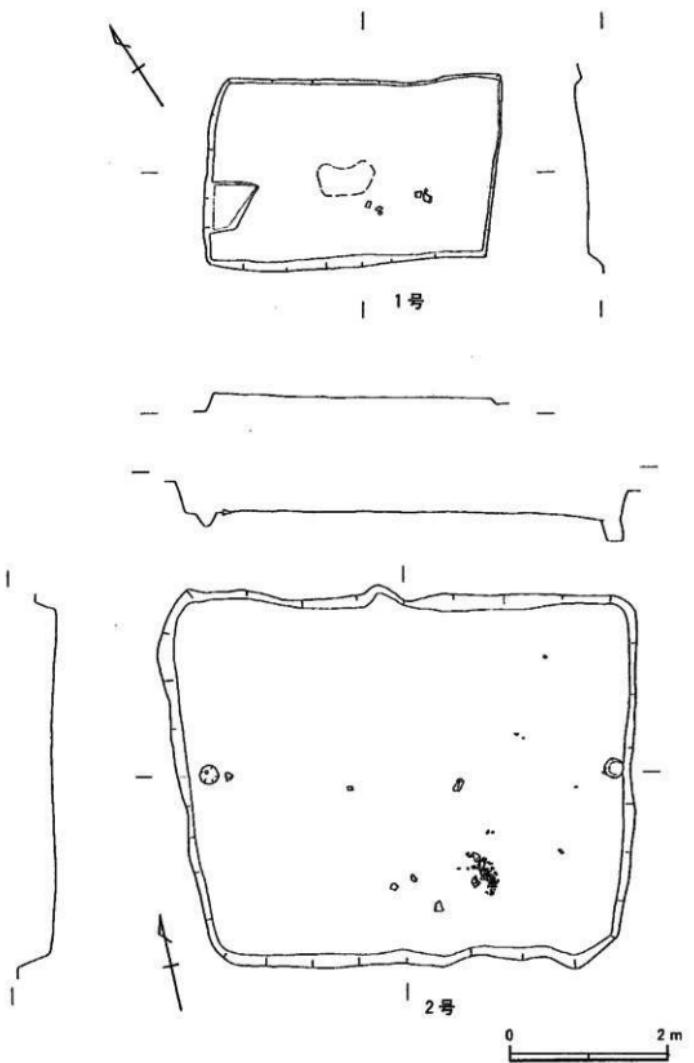
##### 5号竪穴住居（第75図）

1辺6m程度の方形の竪穴住居と想定されるもので、壁は確認されず、埋土の違いによる床のみの検出である。主軸は磁北方向である。

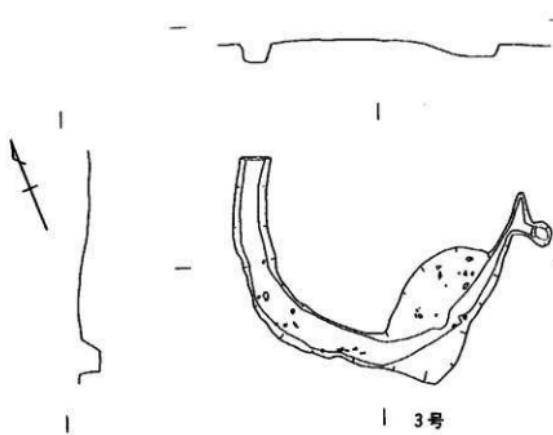
遺物、柱穴は検出出来なかった。

##### 6号竪穴住居（第75図）

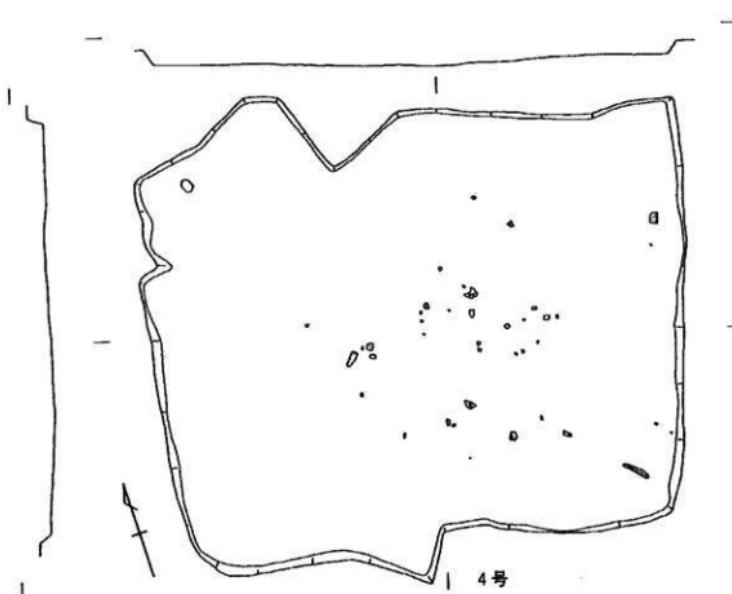
6.2m×5.8mの方形の竪穴住居で深さ約10cmを残し、短軸が磁北方向からやや東に振っている。西辺の中央部に突起があることから、方形の間仕切住居であると思われるが、他に間仕切が検出されず原型は不明である。



第73図 1・2号住居実測図



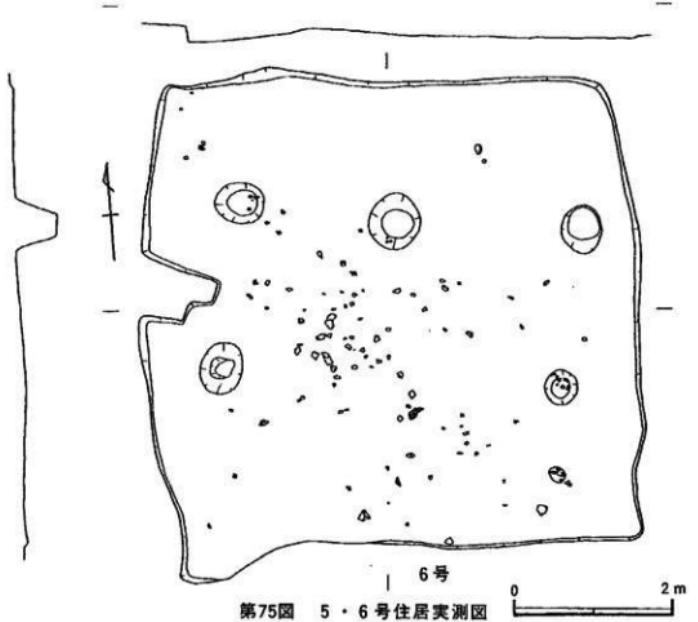
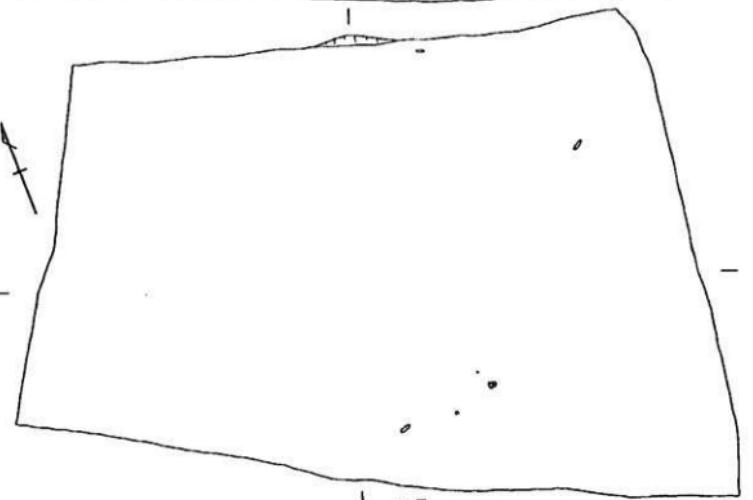
3号



4号

第74図 3号周溝状造構・4号住居実測図





第75圖 5・6號住居実測図

遺物は、床面から浮いた形で検出され、壺が出土した。

柱穴は、直径60cm深さ50cmのものが、5箇所に検出された。

#### 7号堅穴住居（第76図）

5.7m×4.8mの方形の堅穴住居で深さ約30cmを残し、短軸が磁北方向からやや東に振っている。

遺物は、床面から浮いた形で検出され、壺・甕・砥石が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

#### 8号土器窓（第76図）

7号住居の東2mの所に掘り込み等の遺構を伴わずに検出されたため、性格不明である。

遺物は、床面から浮いた形で検出され、壺・甕・高坏が出土した。

#### 9号堅穴住居（第76図）

6.2m×5.8mの不整形の堅穴住居で深さ約20cmを残し、短軸は磁北方向である。

全ての辺に突起状の段が見られることから、方形の間仕切住居である可能性が高い。

遺物は、床面から浮いた形で検出され、壺・甕・鉢・打製石鎌が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

#### 10号堅穴住居（第77図）

4.5m×3.4mの方形の堅穴住居で深さ約20cmを残し、短軸は磁北方向よりやや東に振る。東辺と南辺の一部を搅乱されている。

遺物は、土器の小片が床面から浮いた形で検出された。

柱穴は検出出来なかった。

#### 11号堅穴住居（第77図）

6m×5.2mの北辺が長い不整台形で30cmの深さを残し、短軸は磁北方向よりやや東に振る。間仕切状の突起を3辺に、壁状の突出を南辺に持つ間仕切住居である。

遺物は、床面からやや浮いた形で壺・甕・器台が検出された。

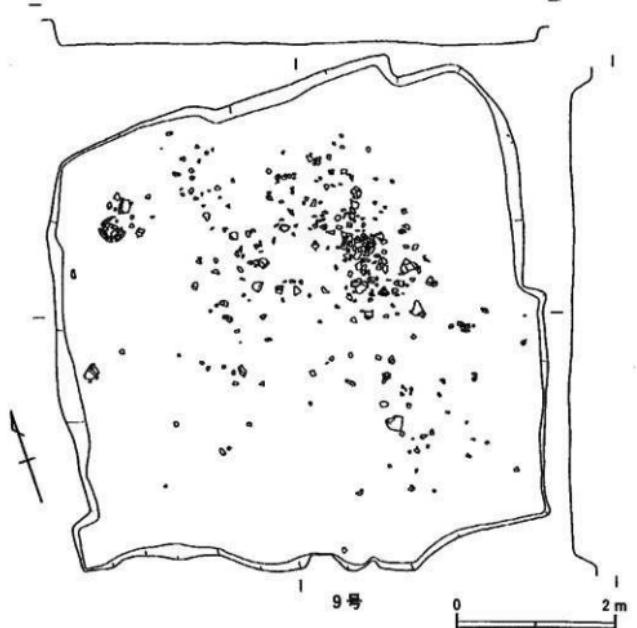
柱穴は検出出来なかった。

#### 12号堅穴住居（第78図）

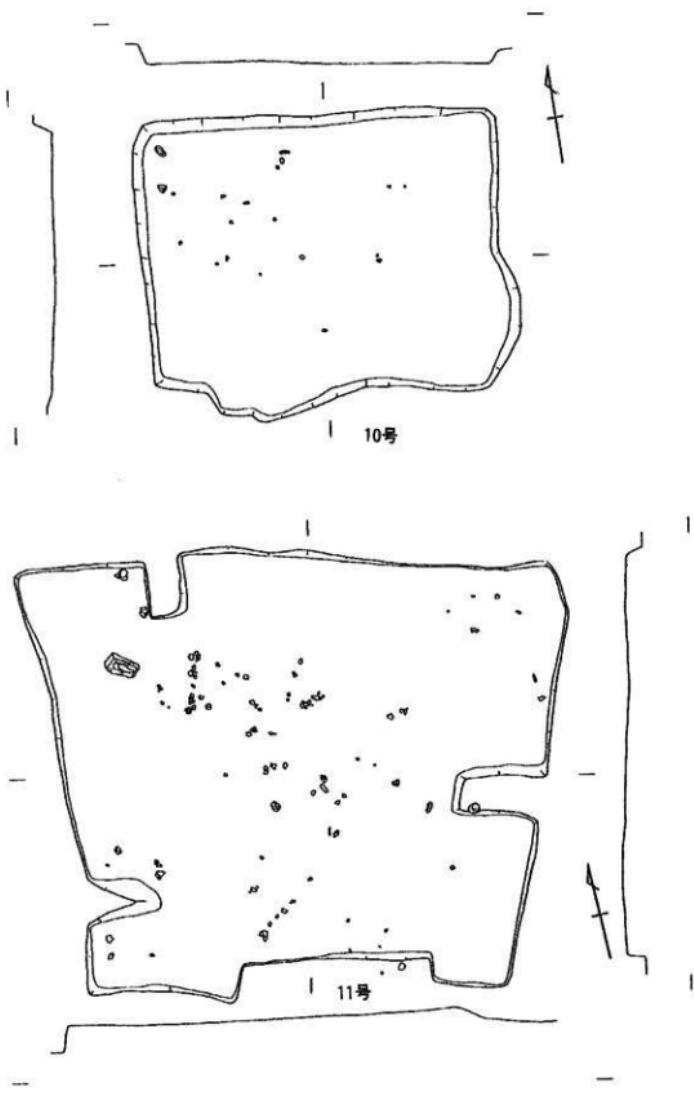
8.8m×7.9mの楕円形で北から南に向かって傾斜しており、最大で20cmの深さを残す。間仕切等の突出は検出出来なかった。

遺物は、床面から浮いた形で検出され、壺・甕・磨製石鎌が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

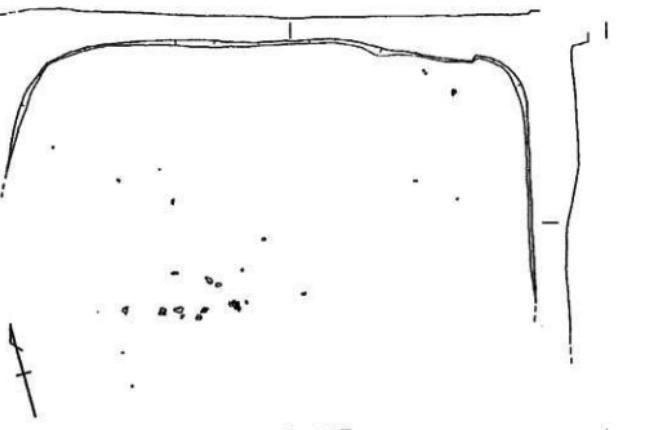
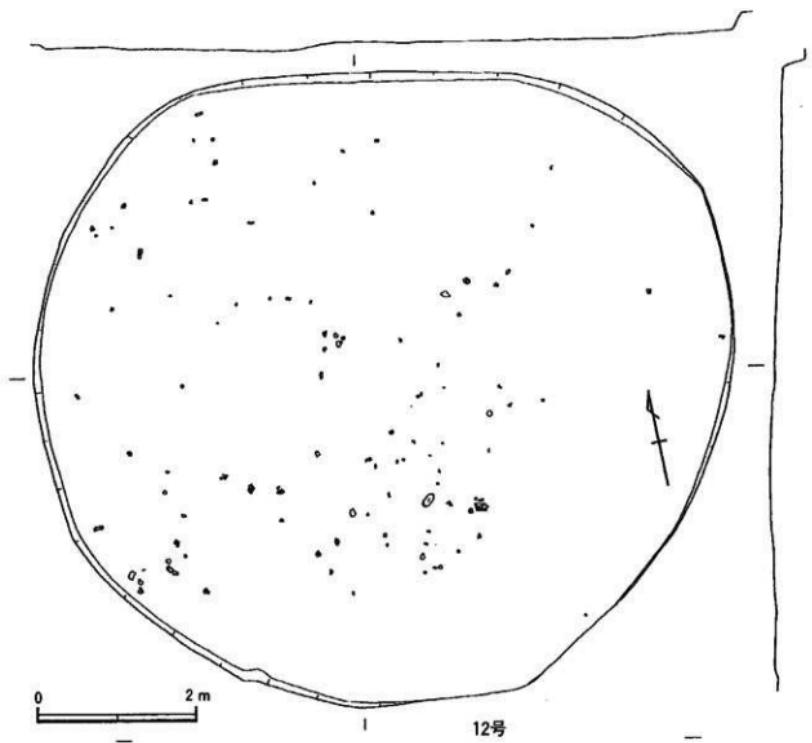


第76図 7・9号住居、8号土器窯実測図



第77図 10・11号住居実測図

0 2 m



第78図 12・13号住居実測図

### 13号竪穴住居（第78図）

1辺6mの方形竪穴住居になると思われるが、壁が殆ど残っておらず原型は不明である。

遺物は、床面からやや浮いた形で壺・甕が検出された。

柱穴は検出出来なかった。

## 2) 遺物

### A. 土器（第79～85図）

#### 1号竪穴住居出土土器（第79図）

122は甕のハの字に開く底部である。

#### 2号竪穴住居出土土器（第79・80図）

123～125は壺で、123は逆L字の口縁部に強く縮まる頭部と大きく張る肩を持つもの、124はラッパ状の口縁のもの、125は逆L字の口縁部に浮文を2個単位で貼り肩と胴部に三角突帯を巡らすものである。126～130は甕で口縁はくの字外反し、屈曲部に稜を持つ。126、129は刻目突帯を持ち、127はハの字で上げ底の底部である。

#### 3号周溝状造構周辺出土土器（第81・82図）

131～137は壺で131～135は口縁で136、137は貼付突帯の胴部である。138～150は甕で口縁はくの字外反し、138、150は屈曲部に稜を持つ。138、139は鉗状の突帯を持ち、141から143は刻目突帯を巡らす。151、152は高坏で158は台付鉢の脚部か、154～156壺の底部、157～159は甕の底部である。156は線刻文が見られる。

#### 4号住居出土土器（第82図）

160、161は縄文早期の平格式上器である。162、165は壺で、163、164は甕である。

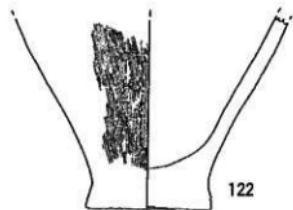
#### 6号住居出土土器（第82図）

166は胴部中位が張る壺、167、168は短頭壺、169は口縁端部、170は底部である。171は甕の底部である。

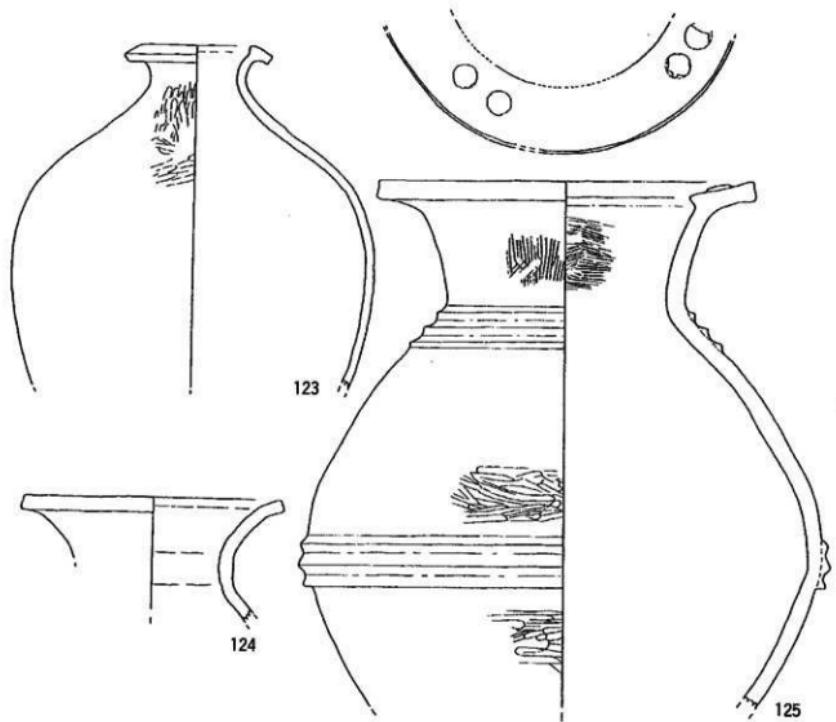
#### 7号竪穴住居出土土器（第82図）

172は直行し突帯を持つ丹塗研磨の壺である。173は壺の肩、174は三角突帯を持つ壺胴部である。

175～177は甕で口縁は緩くくの字外反し、刻目突帯を持つ。178、179は口縁部と底部である。



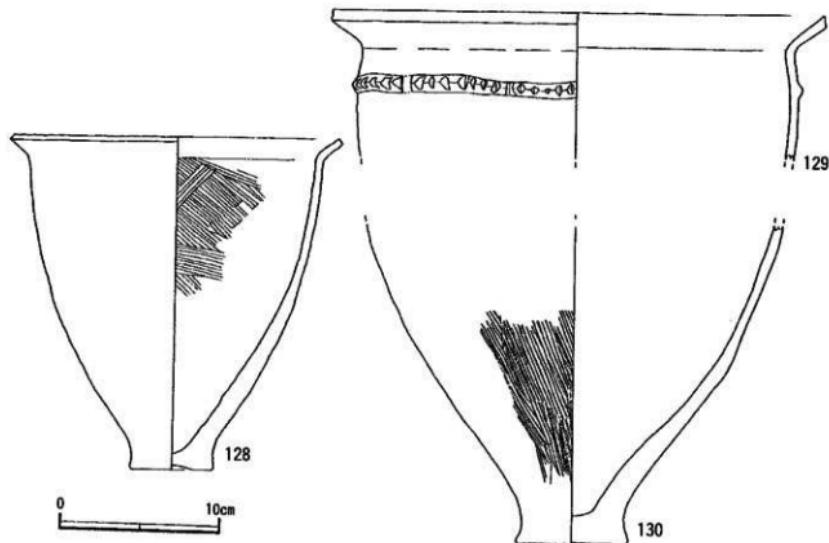
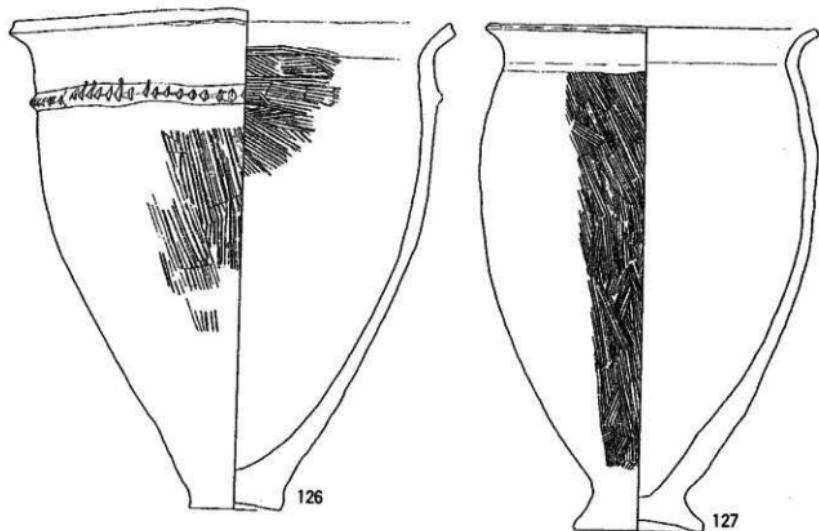
1号住居出土土器



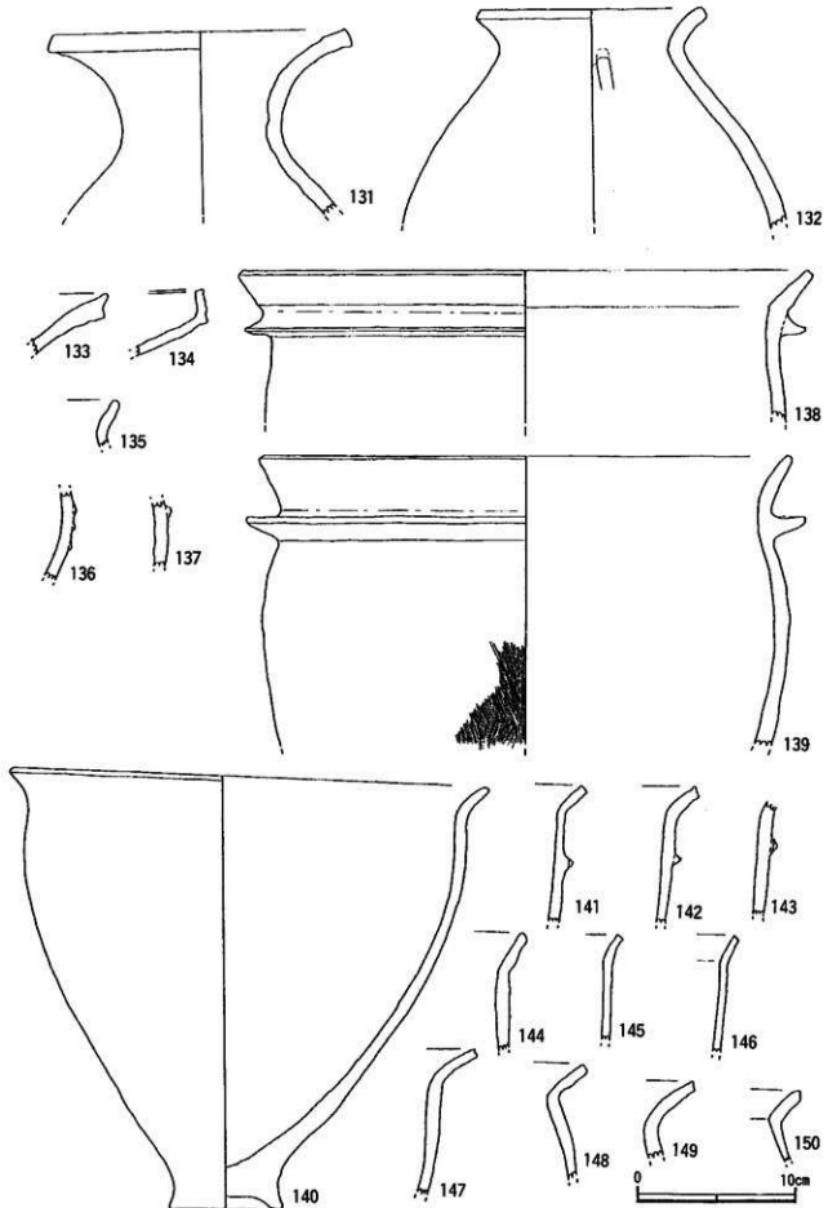
2号住居出土土器

第79図 1・2号住居出土土器

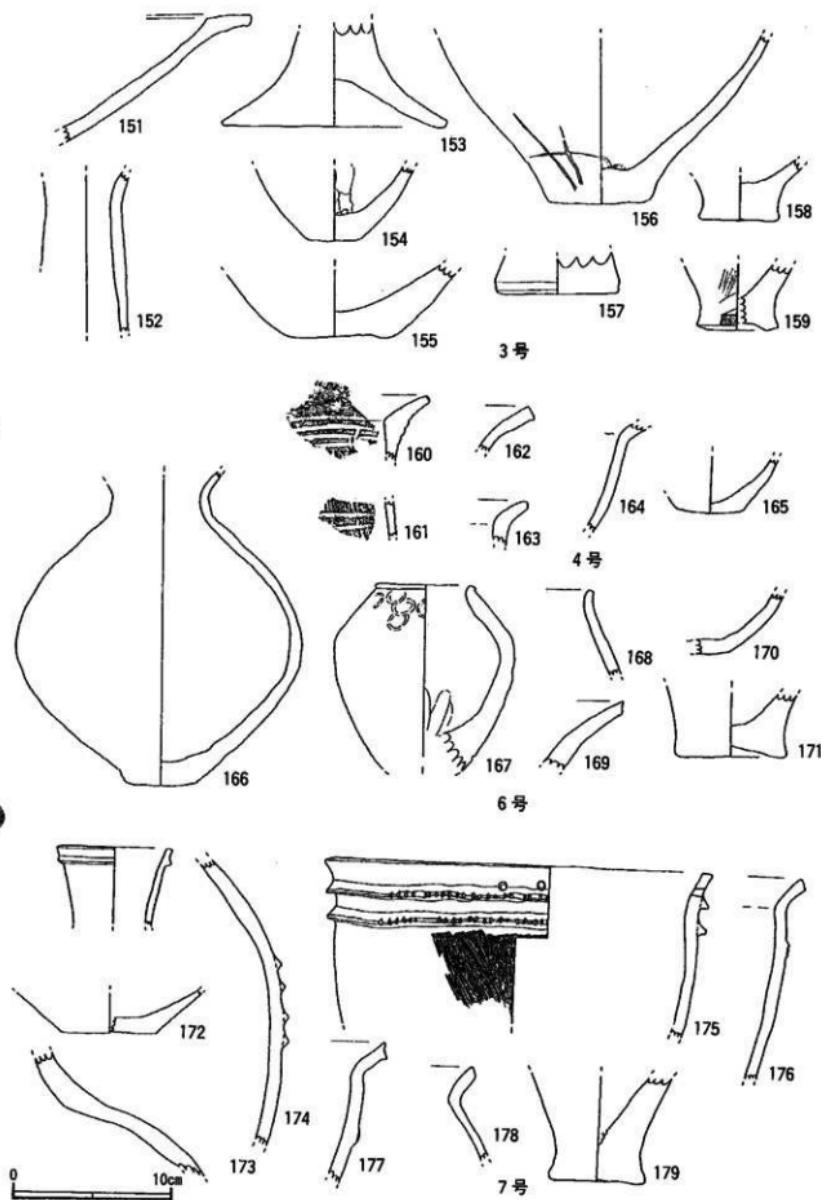




第80図 2号住居出土土器実測図



第81図 3号周溝状造構出土土器実測図



第82図 3号周溝状造構、4・6・7号住居出土土器実測図

#### 8号土器溜出土土器（第83図）

180、181、184はくの字外反する壺の口縁で184は刻目突帯を持つ。182は壺、183は碗のII縁である。185は透かしを持つ小型高壺の脚部、186、187は壺の底部、188、189は壺の底部である。

#### 9号堅穴住居出土土器（第83・84図）

190は鉢状になる壺の口縁部で、上面8～9列×6～8行と側面1列に小さな竹管状のもので連続刺突が施される。191～195はくの字外反する口縁と刻目突帯を持つ壺で、196は突帯の無い壺、197は直行する口縁の壺、198、199は壺の底部である。200は口縁部を折曲げた後に半円状に丸くした鉢で内面丹塗りである。

#### 10号住居出土土器（第85図）

201は壺の口縁端部、202は壺の口縁部である。

#### 11号住居出土土器（第85図）

203は壺の口縁、204は三角突帯を持つ壺の肩部である。205～209はくの字外反する口縁の壺で、205～207は刻目突帯を持つ。210は大きく開く器台の裾部、211～213は壺の底部である。

#### 12号住居出土土器（第85図）

214～216は三角突帯を持つ壺の肩部から胴部である。217～226は壺で、217～221はくの字外反する口縁部、222は直行するII縁、223、224は逆L字状の口縁部である。225、226はハの字に開く底部で上げ底である。

#### 13号住居出土土器（第85図）

227、228は三角突帯を持つ壺の肩部で、229は台形突帯を持つ壺の胴部である。230は長くハの字に開く壺の底部で、端部に稜を持つ。

#### B. 石器（第86図）

各遺構から台石状の礫等が出土しているが、ここでは特徴的なものしか図示していない。

#### 2号住居出土石器

231は基部がやや内湾する磨製石鎌で、両側刃に刃部を研ぎ出している。

232は不明石製品で全面研磨しているが、一部を欠損している。質の悪いヒスイ製で、垂飾品と思われる。

#### 3号周溝状遺構出土石器

233は流紋岩製の石斧で前後とも欠損している。中央部に茶褐色の筋が13本程あり、紐で縛った

跡の様に見える。

234は細長の砥石で、断面長方形である。6面全て使用している。

#### 4号住居出土石器

235は基部を欠損した磨製石鎌で、両側刃に刃部を研ぎ出している。

#### 5号住居出土石器

236は砥石で、短側面を片側から斜めに研ぎ落としているが先端部に僅かな平坦部が見られる。後部を欠損しているが、他の面は平面になっている。柱状片刃石斧の可能性もある。

#### 7号住居出土石器

237は大型の砥石で、6面とも使用されている。

238は両側刃に調整が入る打製の石鎌である。

239は打製石鎌で、細かな調整はされていない。

#### 9号住居出土石器

240は有茎式の打製石鎌で茎部を欠損するが、全面に丁寧な調整が加えられている。

241も有茎式の打製石鎌で茎部、先端部を欠損し、荒目の調整である。

#### 12号住居出土石器

242は砥石で、短側面を両面から斜めに研いでいる。後部を欠損しているが、他の面は平面になっている。

243は基部が内湾する磨製石鎌で、両側刃に刃部を幅広に研ぎ出している。

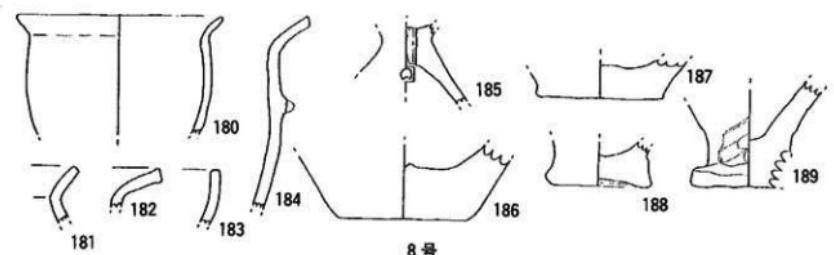
### 5. その他の遺構と遺物

#### 1) 遺構

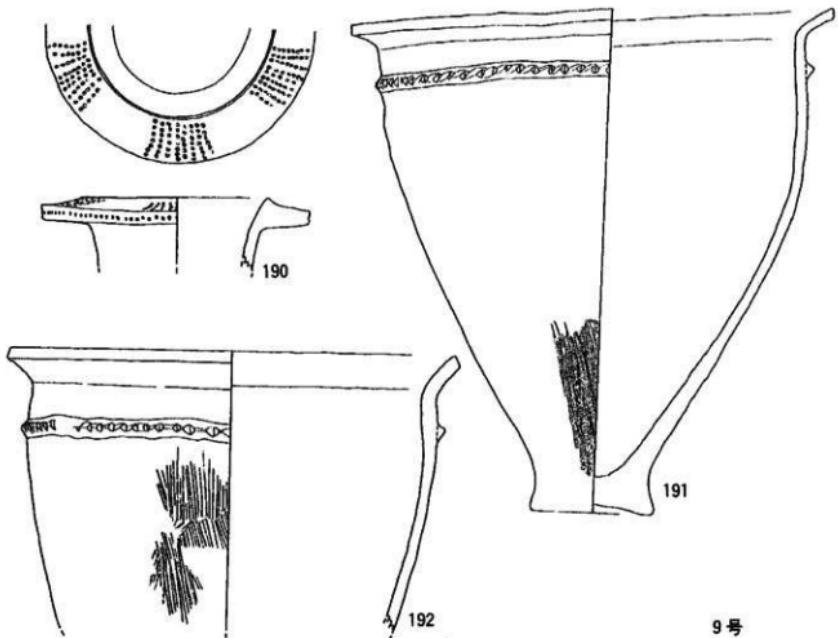
大型の溝状遺構が東西方向に検出された。実際には丘陵南部の傾斜を利用して平坦面を作った際の段が、埋まったものと思われる。弥生時代の聚穴住居が殆ど削平されてしまっていたこと、埋土からは近世以降の遺物しか検出されなかった点から近世以降の時期を考えている。

#### 2) 遺物（第86図）

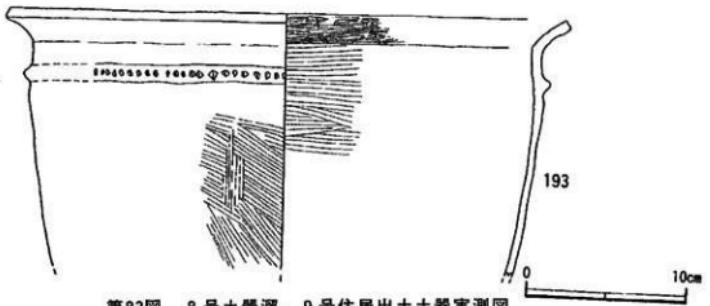
244は表採された碧玉製の管玉である。



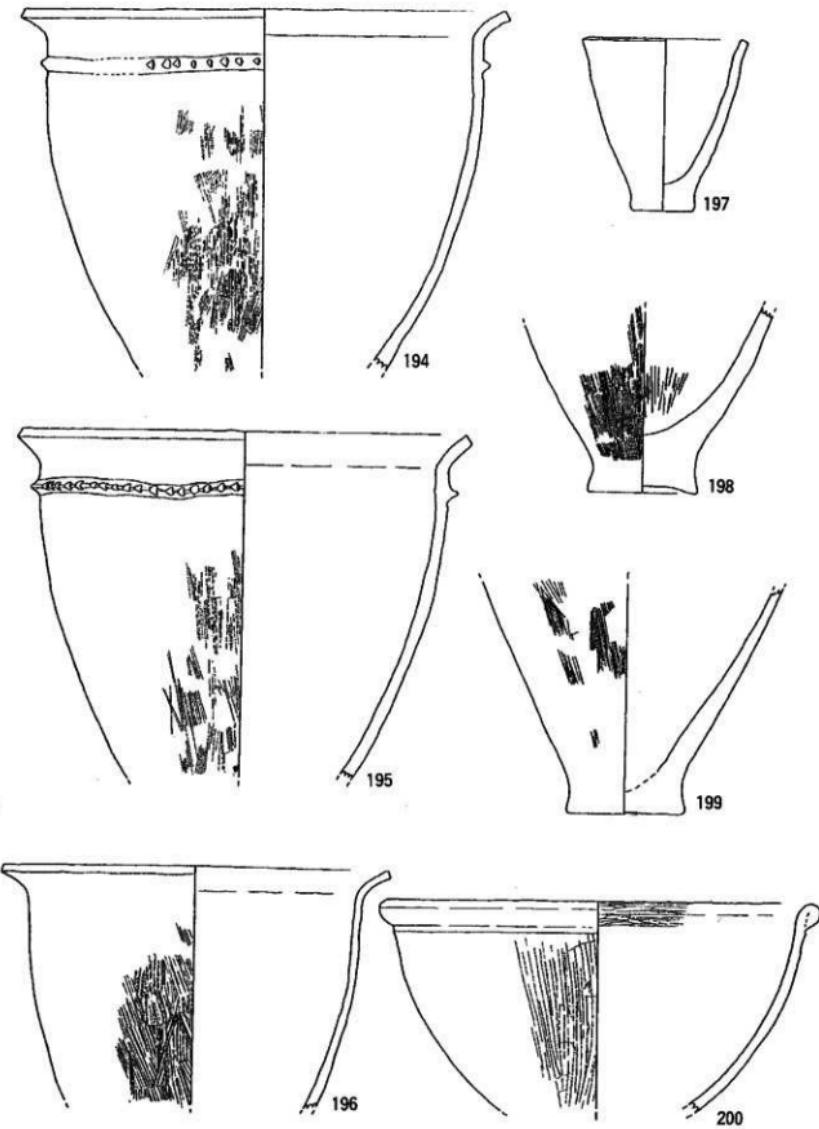
8号



9号

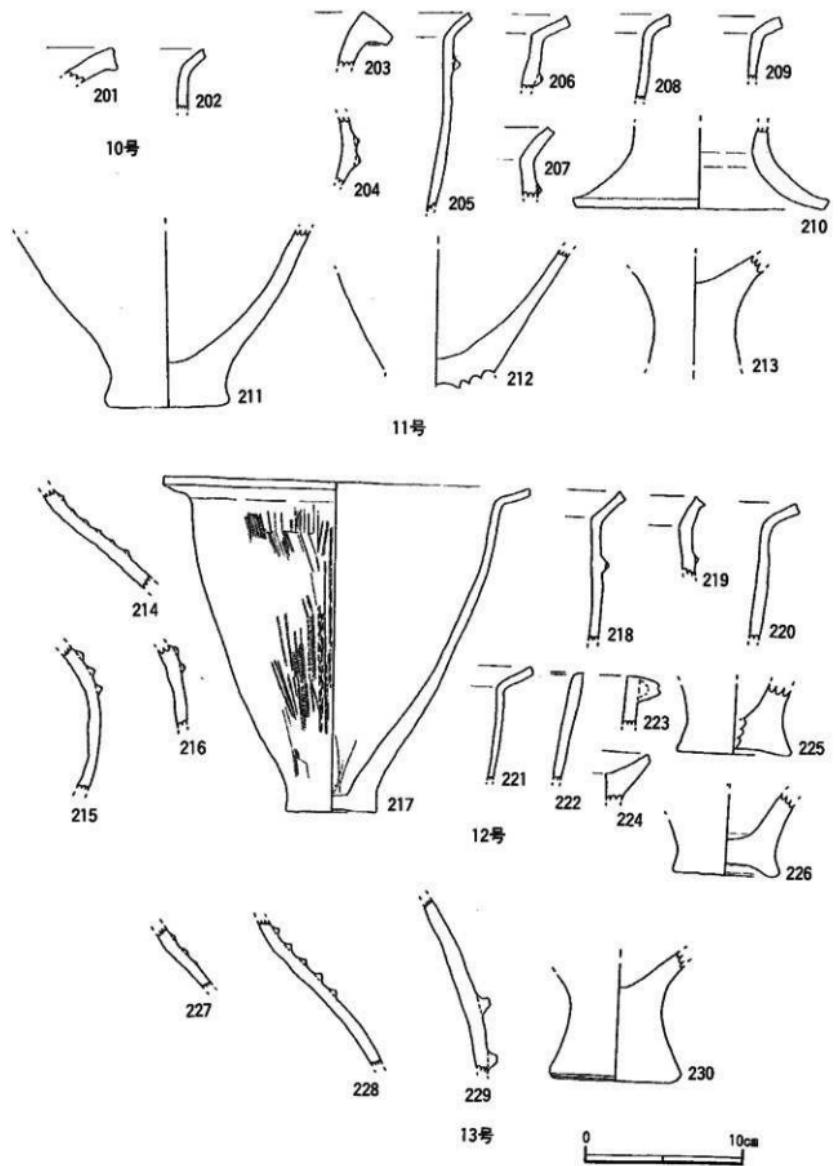


第83圖 8号土器、9号住居出土土器実測図

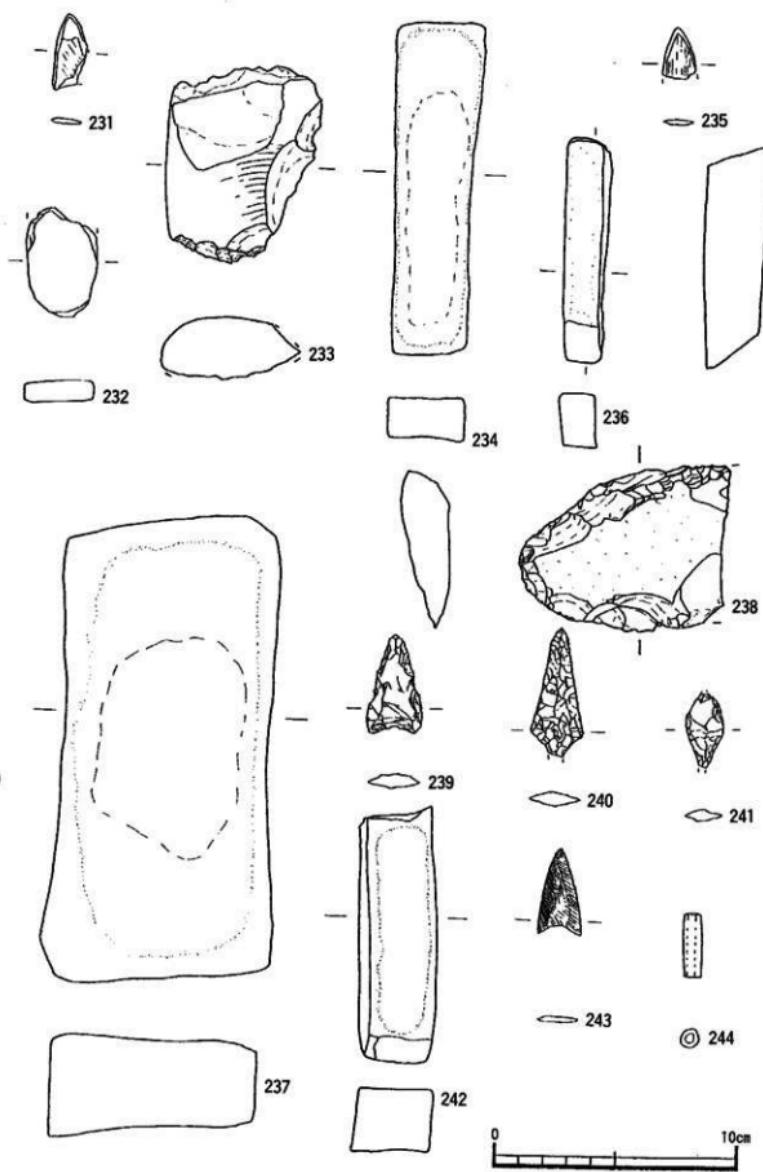


第84図 9号住居出土土器実測図

0 10cm



第85図 10・11・12・13号住居出土土器実測図



第86圖 出土石器実測図

## 6. 小 結

### 縄文時代

山下第1遺跡の縄文時代早期について特徴を挙げると次のようになる。

- 1 B-4グリッドでは碟、集石の量が厚く面的である点
- 2 上器の出土量は多くないが土器型式が多様である点

1については、出土の状況が小さな谷を挟んで北側に位置する車坂第3遺跡の第1区の状況に類似する。本遺跡の場合は、比較すると広がりが狭く、厚みも薄いことが目立つ。これは使用期間が短いためだと理解している。車坂第3遺跡が少ない土器型式で膨大な砾を廃棄したことと本遺跡の多様な土器型式で少ない砾廃棄の間には、特定の土器型式時期における砾廃棄の習慣を感じられる。

2については、条痕文土器類、押型文土器、桑ノ丸式土器類、下剥峰式土器類と平格・塞ノ神式土器類等が見られるが、吉田式上器類、角筒土器は見られない。丘陵中央部の学園都市遺跡群や北側の枝丘陵にある西の原遺跡で吉田式土器類や角筒土器類が検出されていることとの相違が注目される。

### 弥生時代

弥生時代について見ると、臺の形態が注目される。口縁形態に、逆L字状・くの字外反・直行、口縁下突帯の有無・刻目の有無、底部形態に、充実脚台・上げ底等の変化が見られる。逆L字状口縁から中期中葉頃に利用が始まり、くの字外反し突帯を持たず上げ底の底部から後期前業で終了すると思われる。中心としては出土量の多い中期後葉～後期初頭頃と思われ、住居間の時期差は殆ど無いと思われる。

住居の配置を見ると、南北方向に並ぶAグループ（1号～7号）と東西方向に並ぶBグループ（9号～13号）の2グループに分けられる。Aグループは方形住居のみで構成され、Bグループは円形住居と方形住居で構成される。両グループ共に間仕切住居を含むが、間仕切の取り付け位置が定型化しておらず、住居の壁も方形の中に収まらないものも見られる。このことに、間仕切による区画を付ける理由があるのかもしれない。

AグループとBグループが同一集落の単位グループと考えられ、共に大型・中型・小型の住居で構成されている点は共通する。大型の円形住居については、単位グループの受け持ち作業等の性格差における採用であるか、集落における計画的配置であるのか不明である。

また、本遺跡の住居の軒数は、車坂遺跡群の住居数に比べるとほぼ同数であるが時期差がないことに特徴がみられ、このことは、丘陵利用の相違と集落間の差が窺われる。

本遺跡の調査は、筆者が初めて調査の全体指揮を執った現場であった。当初の見込みと異なり、弥生時代の住居群の検出、縄文時代早期の包含層の厚みと広がりに、調査予定期間の3箇月で終了出来るかと不安と恐怖を覚えたものである。結局、縄文時代の調査は、全面発掘は諦めてグリッド掘りにすることと、休日返上・雨天決行で漸く終了させたものである。しかし、自分の中に何か大切なものが残っており、それが報告書を書く段階で充分な事が書けない原因と成っている事が残念である。

第9表 縄文土器観察表

番号	部 位	調 整	文 样	色 調	胎 土	備 考
1	口縁部	内面ナデ	—	褐 色	1mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	口唇部に刺突、ヘラ状施文具による押圧	タ		
2	口縁部	内面ナデ	—	暗 橙	2mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	口唇部に刺突、ヘラ状施文具による押圧	タ		
3	口縁部	内面ナデ	—	褐 色	0.5mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	ヘラ状施文具による押圧	灰 褐 色		
4	口縁部	内面ナデ	—	褐 色	2.3mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	ヘラ状施文具による押圧	淡 褐 色		
5	口縁部	内面ナデ	—	淡 褐 色	0.5mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	口唇部に刺突、ヘラ状施文具による押圧	灰 褐 色		
6	口縁部	内面ナデ	—	暗 褐 色	0.5mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	ヘラ状施文具による押圧	タ		
7	口縁部	内面ナデ	—	暗 褐 色	1mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	ヘラ状施文具による押圧	明赤褐 色		
8	口縁部	内面ナデ	—	褐 色	2.3mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	ヘラ状施文具による押圧	タ		斜めの押圧
9	口縁部	内面ナデ	—	暗 褐 色	1mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	卷貝の刺突	タ		
10	口縁部	内面ナデ	—	黄 褐 色	1mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	卷貝の押引き	黒 褐 色		
11	口縁部	内面ナデ	—	淡 褐 色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	灰 褐 色		
12	胴 部	内面ナデ	—	暗 褐 色	1.5mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	タ		
13	胴 部	内面ナデ	—	暗 褐 色	0.3mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	暗 橙 色		
14	胴 部	内面ナデ	—	淡 黄 橙 色	0.5mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	タ		
15	胴 部	内面ナデ	—	暗 橙 色	微細の砂粒を含む	
		外面条痕	—	タ		
16	胴 部	内面ナデ	—	暗 橙 色	微細の砂粒を含む	
		外面条痕	—	暗 黄 橙 色		
17	胴 部	内面ナデ	—	明赤褐 色	4mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	暗 褐 色		
18	胴 部	内面ナデ	—	暗 黄 橙 色	微細の砂粒を含む	
		外面条痕	—	タ		
19	胴 部	内面ナデ	—	暗 黄 橙 色	微細の砂粒を含む	
		外面条痕	—	タ		
20	胴 部	内面ナデ	—	暗 黄 橙 色	微細の砂粒を含む	
		外面条痕	—	暗 橙 色		
21	口縁部	内面ナデ	—	褐 色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	口唇部に刻み	タ		
22	口縁部	内面ナデ	—	褐 色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	口唇部に刻み	タ		
23	口縁部	内面ナデ	—	橙 色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	口唇部に刻み	タ		
24	口縁部	内面ナデ	—	暗 褐 色	1mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	口唇部に刻み	黒 褐 色		
25	口縁部	内面ナデ	—	灰 褐 色	1mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	淡 褐 色		
26	口縁部	内面ナデ	—	褐 色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	タ		
27	胴 部	内面ナデ	—	茶 褐 色	1mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	タ		
28	胴 部	内面ナデ	—	暗 橙 色	微細の砂粒を含む	
		外面条痕	—	橙 色		
29	胴 部	内面ナデ	—	灰 黄 色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面条痕	—	暗 橙 色		

番号	部位	調整	文様	色調	胎土	備考
30	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	明褐色 暗橙色	0.5mm以下の砂粒を含む	
31	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	橙色 赤褐色	2mm以下の砂粒を含む	
32	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗橙色 暗赤褐色	微細の砂粒を含む	
33	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗赤褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
34	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗橙色 暗褐色	微細の砂粒を含む	
35	口縁部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗褐色 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	
36	口縁部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗黄橙色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
37	刷部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による流水文	褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
38	刷部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
39	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
40	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗黄橙色 タ	3mm以下の砂粒を含む	
41	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	暗橙色 タ	3mm以下の砂粒を含む	
42	胴部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	橙色 暗橙色	2mm以下の砂粒を含む	
43	底部	内面ナデ 外面タ	— 梅状施文具による綾杉文	褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
44	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点文	褐色 タ	4mm以下の砂粒を含む	
45	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点文	暗黄褐色 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	
46	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点、綾杉文	暗黄橙色 暗橙色	2mm以下の砂粒を含む	
47	刷部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点、綾杉文	暗褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
48	胴部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点、綾杉文	暗褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
49	胴部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点、綾杉文	暗黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
50	底部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点、綾杉文	暗黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
51	刷部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点文	暗黄褐色 明赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	
52	胴部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁の列点文	暗赤褐色 タ	1mm以下の砂粒を含む	
53	胴部	内面ナデ 外面タ	— 貝殻腹縁の刺突	暗黄褐色 灰黄褐色	2.5mm以下の砂粒を含む	
54	胴部	内面ナデ 外面タ	— 貝殻腹縁の刺突	暗黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
55	口縁部	内面ナデ 外面タ	— 口唇部に刻み、ヘラ状施文具による沈線	暗黄褐色 暗褐色	2mm以下の砂粒を含む	
56	口縁部	内面ナデ 外面タ	— ヘラ状施文具による沈線	暗褐色 黒褐色	1mm以下の砂粒を含む	
57	胴部	内面ナデ 外面タ	— ヘラ状施文具による綾杉文	暗黄褐色 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	
58	胴部	内面ナデ 外面タ	— ヘラ状施文具による綾杉文	暗黄橙色 タ	2mm以下の砂粒を含む	

番号	部 位	調 整	文 様	色 調	胎 土	備 考
59	胴 部	内面ナデ 外面△	— ハラ状施文具による綾杉文	暗黄褐色 △	2mm以下の砂粒を含む	
60	口縁部	内面ナデ 外面△	口唇部にヘラの押圧、山形押型	黄褐色 △	1mm以下の砂粒を含む	
61	口縁部	内面ナデ 外面△	口唇部にヘラの押圧、楕円押型	黄褐色 △	1mm以下の砂粒を含む	
62	胴 部	内面ナデ 外面△	— 楕円押型	暗黄褐色 △	微細の砂粒を含む	
63	底 部	内面ナデ 外面△	楕円押型	暗褐色 △	5mm以下の砂粒を含む	網代底
64	胴 部	内面ナデ 外面△	横山形押型 縱山形押型	暗茶褐色 赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	
65	口縁部	内面ナデ 外面△	横山形押型 縱山形押型	暗褐色 △	3mm以下の砂粒を含む	
66	口縁部	内面ナデ 外面△	横山形押型 縱山形押型	灰褐色 暗橙色	3mm以下の砂粒を含む	
67	胴 部	内面ナデ 外面△	— 山形押型	褐色 橙色	6mm以下の砂粒を含む	
68	口縁部	内面ナデ 外面△	— 山形押型	暗橙色 △	2mm以下の砂粒を含む	
69	口縁部	内面ナデ 外面△	口唇部に押圧、繩文	橙色 △	3mm以下の砂粒を含む	
70	胴 部	内面ナデ 外面△	— 繩文	橙色 △	3mm以下の砂粒を含む	
71	口縁部	内面ナデ 外面△	— ハラ状施文具による沈線	暗橙色 △	3mm以下の砂粒を含む	
72	口縁部	内面ナデ 外面△	— ハラ状施文具による沈線	淡褐色 淡橙褐色	3mm以下の砂粒を含む	
73	口縁部	内面ナデ 外面△	— 遺点文、ハラ状施文具による沈線	褐色 橙褐色	1mm以下の砂粒を含む	
74	胴 部	内面ナデ 外面△	— 遺点文、ハラ状施文具による沈線	黄褐色 淡褐色	1mm以下の砂粒を含む	
75	胴 部	内面ナデ 外面△	— 遺点文、楕状施文具による幾何学文	暗赤褐色 △	1mm以下の砂粒を含む	
76	胴 部	内面ナデ 外面△	— 燃系、ハラ状施文具による沈線	暗黄褐色 △	微細の砂粒を含む	
77	胴 部	内面ナデ 外面△	— 燃系、遺点文、ハラ状施文具による沈線	黄褐色 △	微細の砂粒を含む	
78	口縁部	内面ナデ 外面△	— 口唇部に押圧・貝殻腹縁の押引	褐色 △	0.5mm以下の砂粒を含む	縫に爪形文
79	口縁部	内面ナデ 外面△	— 貝殻腹縁の押引	褐色 △	1mm以下の砂粒を含む	
80	口縁部	内面ナデ 外面△	— 櫛状施文具による不整文、口唇部に削み	黑褐色 △	1mm以下の砂粒を含む	
81	口縁部	内面ナデ 外面ナデからナデ	— —	黄褐色 △	2mm以下の砂粒を含む	
82	口縁部	内面ナデ 外面ナデからナデ	— —	黄褐色 △	2mm以下の砂粒を含む	
83	胴 部	内面ナデ 外面△	— 貝殻腹縁の刺突	灰褐色 淡褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	
84	底 部	内面ナデ 外面△	— 貝殻腹縁の刺突	暗黄褐色 暗赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	
85	底 部	内面ナデ 外面△	— —	橙色 △	4mm以下の砂粒を含む	網代底
86	底 部	内面ナデ 外面△	— —	淡褐色 △	1mm以下の砂粒を含む	網代底

第10表 石器観察表

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
87	石鎌	2.12	2	0.4	1.00	チャート	
88	石鎌	1.2	1.2	0.2	0.19	黒曜石	
89	石鎌	1.5+α	1.1	0.3	0.46	チャート	
90	石鎌	1.2	1.25	0.2	0.17	黒曜石	
91	石鎌	1.5+α	1.6+α	0.35	0.46	黒曜石	
92	石鎌	1.6	1.4	0.5	0.56	頁岩	
93	石鎌	1.5	1.35	0.3	0.43	黒曜石	
94	石鎌	1.6+α	1.3+α	0.35	0.71	チャート	
95	石鎌	1.85+α	1.35+α	0.45	0.84	頁岩	
96	石鎌	1.6+α	1.3+α	0.4	0.53	チャート	
97	石鎌	1.4	1.1	0.2	0.21	黒曜石	
98	石鎌	1.5	1.4	0.25	0.3	チャート	
99	石鎌	1.5+α	1.1+α	0.3	0.25	黒曜石	
100	石鎌	2+α	1.7+α	0.6	1.35	チャート	
101	石鎌	1.45	1.5	0.4	0.52	チャート	
102	石鎌	2.05	1.7+α	0.35	0.67	黒曜石	
103	石鎌	2.2	1.2+α	0.35	0.82	チャート	
104	石鎌	1.5+α	1.4	0.35	0.61	黒曜石	
105	石鎌	1.9	1.6	0.3	0.66	チャート	
106	石鎌	1.9+α	1.1+α	0.25	0.16	黒曜石	
107	石鎌	1.4+α	1+α	0.35	0.29	黒曜石	
108	石鎌	1.1	1	0.3	0.33	黒曜石	
109	石鎌	2.4+α	1.43+α	0.52	1.32	安山岩	
110	石鎌	1.3	1.24	0.35	0.32	黒曜石	
111	石鎌	1.5+α	1.4+α	0.35	0.42	黒曜石	
112	石鎌	1.65	1.35	0.35	0.4	黒曜石	
113	石鎌	3.2	1.3	0.4	0.89	チャート	
114	石鎌	2.2	1.6	0.25	0.75	頁岩	

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
115	石鎌	2.4	1.8	0.4	1.07	頁岩	
116	石鎌	1.5+α	1.3+α	0.35	0.38	チャート	
117	石鎌	1.93+α	1.4+α	0.22	0.56	チャート	
118	石鎌	2.28+α	1.38+α	0.25	0.67	チャート	
119	石匙	5.4	3.8	1.2	16.48	チャート	
120	石斧	4.3	3.6	1.2+α	30	安山岩	
121	石斧	2.7+α	2.9	1+α	10	流紋岩	

231	石鎌	3.1	1.3	0.2	1.22	粘板岩	
232	—	4.5	3.0	0.9	20.70	ヒスイ	
233	石斧	6.55	5.75	2.4	150	流紋岩	
234	砥石	13.6	3.7	1.8	152	砂岩	
235	石鎌	2.1	1.4	0.2	0.69	粘板岩	
236	砥石	10.05	1.5	2.3	64.5	砂岩	柱状片刃石斧?
237	砥石	18.2	9.7	4.3	1.325	砂岩	
238	石鎌	9.7	6.5	2.0	124	頁岩	
239	石鎌	4.0	2.2	0.5	4.64	頁岩	
240	石鎌	5.25	2.15	0.7	4.67	頁岩	
241	石鎌	3.05	1.50	0.55	2.04	頁岩	
242	砥石	10.6	3.2	2.6	160	砂岩	柱状片刃石斧?
243	石鎌	35.5	18.0	2.0	1.59	粘板岩	
244	菅玉	2.6	0.7	0.8	2.4	碧玉	

第11表 弥生土器観察表

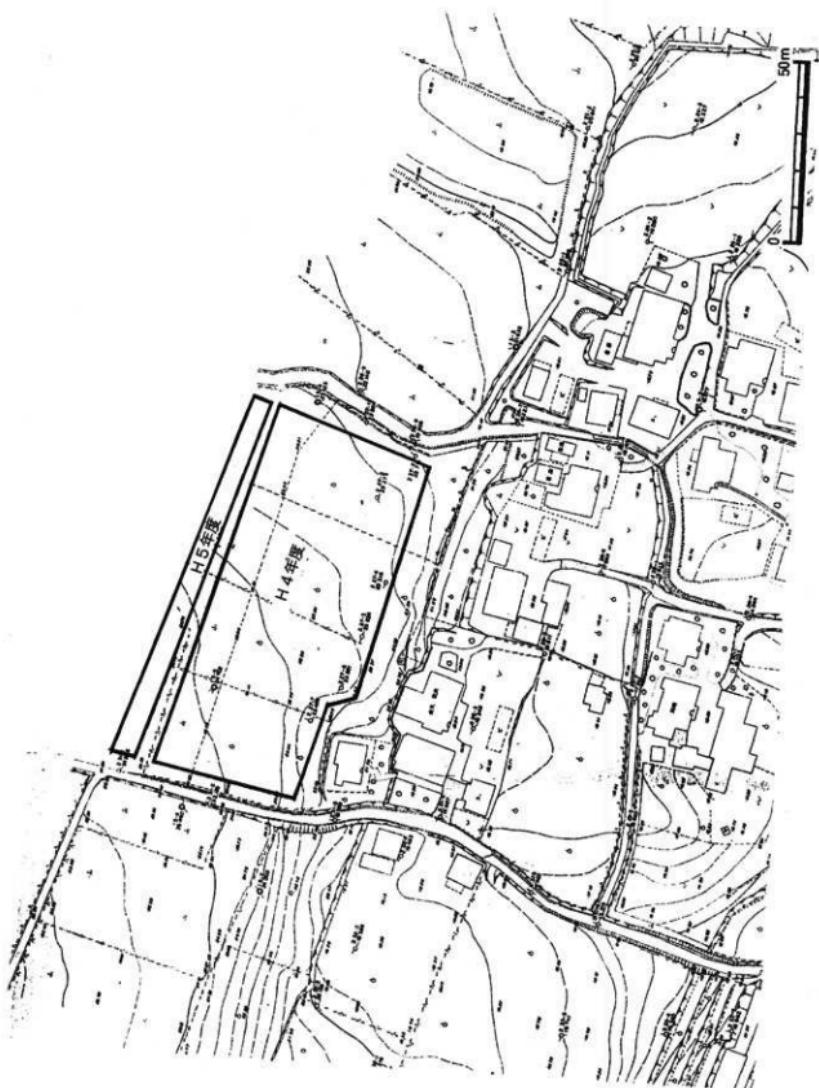
番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
122	壺	内面ナデ 外面ハケ	淡褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
123	壺	内面ナデ 外面研磨	褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
124	壺	内面一 外面一	黄褐色 タ	4mm以下の砂粒を多く含む	
125	壺	内面ハケ 外面ハケ、ヨコナデ、研磨	灰褐色 橙褐色	2.5mm以下の砂粒を含む	円形浮文 突帯
126	壺	内面ナデ 外面ヨコナデ、ハケ	褐色 タ	1mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着 刻目突帯
127	壺	内面ハケ 外面ヨコナデ、ハケ	黄土色 タ	4mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着
128	壺	内面ハケ 外面ヨコナデ、ハケ	褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
129	壺	内面一 外面ナデ	赤褐色 黄褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	刻目突帯
130	甕	内面ナデ 外面ハケ	赤褐色 タ	1mm以下の砂粒を含む	スヌ付着
131	壺	内面一 外面一	黄褐色 タ	2.5mm以下の砂粒を多く含む	
132	壺	内面ナデ 外面タ	明橙色 タ	3mm以上の砂粒を多く含む	
133	壺	内面ナデ 外面ハケ後荒いナデ	明橙褐色 タ	砂粒を含む	
134	壺	内面ナデ 外面タ	黄白色 タ	1mm以下の砂粒を多く含む	
135	甕	内面ヨコナデ 外面タ	白色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
136	壺	内面ナデ 外面タ	淡黑色 黄白色	1mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
137	壺	内面一 外面ナデ	白黄色 赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
138	甕	内面ナデ 外面タ	橙褐色 淡褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	突帯
139	壺	内面ハケ 外面タ	黄褐色 タ	4mm以下の砂粒を多く含む	突帯
140	甕	内面一 外面ハケ	黄褐色 褐色	4mm以下の砂粒を含む	スヌ付着
141	甕	内面ナデ 外面ハケからナデ	橙褐色 タ	1mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着 刻目突帯
142	壺	内面二 外面ナデ	橙白色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着 刻目突帯
143	甕	内面ナデ 外面タ	黑色 黄白色	1mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着 刻目突帯
144	甕	内面ナデ 外面タ	黄橙色 タ	6mm以下の砂粒を多く含む	
145	甕	内面ハケからナデ 外面ヨコハケからナデ	橙白色 タ	3mm以下の砂粒を含む	スヌ付着
146	甕	内面ハケからナデ 外面タ	黄白色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
147	甕	内面ナデ 外面タ	黄白色 タ	5mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着
148	甕	内面ナデ 外面タ	黄灰色 黄白色	6mm以下の砂粒を多く含む	
149	甕	内面ナデ 外面ヨコナデ	黄白色 タ	3mm以下の砂粒を多く含む	

番号	器種	調 整	色 調	胎 上	備 考
150	壺	内面ナデ 外面々	黄白色 。	3mm以下の砂粒を多く含む	
151	高 壊	内面ナデ 外面々	黄褐色 々	6mm以下の砂粒を多く含む	
152	高 壊	内面ナデ 外面研磨	黄褐色 々	3mm以下の砂粒を多く含む	
153	鉢 脚 の 部	内面ナデ 外面ナデから荒い研磨	黄白色 々	8mm以下の砂粒を多く含む	
154	壺	内面ナデ 外面研磨	淡 黒 黄白色	3mm以下の砂粒を多く含む	
155	壺	内面ナデ 外面々	淡 黑 赤褐色	5mm以下の砂粒を多く含む	
156	壺	内面ナデ 外面々	黑褐色 帶褐色	4mm以下の砂粒を多く含む	
157	壺 の 底 部	内面一 外面一	茶褐色 々	2mm以下の砂粒を多く含む	
158	壺 の 底 部	内面ナデ 外面々	黄白色 々	2mm以下の砂粒を多く含む	
159	壺 の 底 部	内面ナデ 外面ハケからナデ	黒 黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
160	深 鉢	内面ナデ 外面々	茶褐色 々	0.5mm以下の砂粒を多く含む	縄文土器
161	深 鉢	内面ナデ 外面々	茶褐色 々	0.5mm以下の砂粒を多く含む	縄文土器
162	壺	内面ナデ 外面々	淡褐色 々	5mm以下の砂粒を多く含む	
163	壺	内面ナデ 外面々	赤褐色 々	5mm以下の砂粒を含む	スス付着
164	壺	内面ナデ 外面ヨコハケからナデ	黄褐色 々	1mm以下の砂粒を含む	スス付着
165	壺	内面ナデ 外面々	淡褐色 黄褐色	1mm以下の砂粒を含む	
166	壺	内面一 外面一	茶褐色 赤褐色	4mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
167	壺	内面ナデ 外面々	黄褐色 々	5mm以下の砂粒を含む	
168	壺	内面ナデ 外面々	赤褐色 々	5mm以下の砂粒を含む	
169	壺	内面ナデ 外面々	赤褐色 々	5mm以下の砂粒を多く含む	
170	壺	内面荒いヘラナデ 外面研磨	赤褐色 々	5mm以下の砂粒を多く含む	
171	壺 の 底 部	内面ナデ 外面々	淡黑色 淡黄色	2mm以下の砂粒を多く含む	
172	壺	内面ナデ 外面研磨	暗黄褐色 赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	丹塗り、突蒂
173	壺	内面ナデ 外面研磨	淡黑色 白褐色	1mm以下の砂粒を含む	
174	壺	内面ハケからナデ 外面ナデ	黑淡色 々	1mm以下の砂粒を含む	突蒂、金雲母
175	壺	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、ハケ	茶褐色 褐色	6.5mm以下の砂粒を含む	スス付着、刻目突蒂
176	壺	内面斜めハケからナデ 外面々	灰褐色 黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	刻目突蒂
177	壺	内面ハケからナデ 外面々	赤褐色 々	2mm以下の砂粒を含む	刻目突蒂

番号	器種	調整	色調	胎土	備考
178	壺	内面ナデ 外面タ	白橙色 黄白色	1mm以下の砂粒を含む	
179	壺の底部	内面ナデ 外面タ	淡黒色 赤褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
180	壺	内面ナデ 外面タ	黄白色 タ	6mm以下の砂粒を多く含む	
181	壺	内面ナデ 外面タ	白橙色 タ	5mm以下の砂粒を多く含む	
182	壺	内面ヨコナデ 外面タ	白橙色 灰褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
183	壺	内面ヨコナデ 外面斜めナデ	淡褐色 黄白色	2mm以下の砂粒を含む	
184	壺	内面ナデ 外面タ	黄白色 タ	6mm以下の砂粒を含む	スス付着 刻目突帯
185	器台	内面ナデ 外面タ	赤褐色 タ	1mm以下の砂粒を含む	
186	壺の底部	内面ナデ 外面タ	黄橙色 タ	5mm以下の砂粒を含む	
187	壺の底部	内面ナデ 外面タ	淡黒色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
188	壺の底部	内面荒いナデ 外面タ	黄灰色 タ	5mm以下の砂粒を多く含む	
189	壺の底部	内面ナデ 外面タ	灰黄色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
190	壺	内面ヨコナデ 外面タ	褐色 タ	1mm以下の砂粒を含む	竹管状工具による 刺突列点文
191	壺	内面一 外面ハケ	茶褐色 黄褐色	砂粒を含む	刻目突帯
192	壺	内面ナデ 外面ハケ、ヨコナデ	褐色 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	スス付着 刻目突帯
193	壺	内面ハケ 外面ヨコナデ	灰褐色 淡褐色	2.5mm以下の砂粒を含む	スス付着 刻目突帯
194	壺	内面一 外面ヨコナデ、ハケ	褐色 淡褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
195	壺	内面一 外面ヨコナデ、ハケ	淡褐色 タ	1mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
196	壺	内面一 外面ハケ、ナデ	黄褐色 淡褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
197	壺	内面一 外面一	赤褐色 褐色	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
198	壺	内面ハケ 外面タ	黒褐色 橙褐色	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
199	壺	内面一 外面ハケ	暗褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	スス付着
200	鉢	内面研磨 外面タ	褐色 黄褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	丹塗り
201	壺	内面ナデ 外面タ	橙白色 タ	1mm以下の砂粒を含む	
202	壺	内面ハケ 外面ナデ	橙色 タ	1mm以下の砂粒を含む	
203	壺	内面ナデ 外面タ	黄白色 タ	1mm以下の砂粒を含む	
204	壺	内面ナデ 外面タ	黄褐色 赤橙色	3mm以下の砂粒を多く含む	刻目突帯
205	壺	内面ナデ 外面タ	黄橙色 タ	1mm以下の砂粒を含む	刻目突帯

番号	器種	調 整	色調	胎 士	備 考
206	甕	内面 ナデ 外面 ヨコのナデ	淡灰色 赤橙色	1mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
207	甕	内面 ナデ、ハケからナデ 外面 ナデ、ハケからヨコナデ	黄色 タ	1mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
208	甕	内面 ハケからナデ 外面 タ	黄白色 タ	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
209	甕	内面 ヘラ 外面 タ	黄橙色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
210	器台	内面 ナデ 外面 タ	橙白色 タ	3mm以下の砂粒を多く含む	
211	甕	内面 ナデ 外面 ハケからナデ	淡黒色 黄橙色	4mm以下の砂粒を多く含む	
212	甕	内面 タテハケからナデ 外面 タ	黄灰色 タ	1mm以下の砂粒を多く含む	
213	甕	内面 ナデ 外面 ハケからナデ	褐色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
214	甕	内面 ナデ 外面 ヨコナデ	褐色 タ	3mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
215	甕	内面 一 外面 ヨコナデ	黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	刻目突帯
216	甕	内面 ナデ 外面 タ	橙褐色 明橙色	3mm以下の砂粒を多く含む	刻目突帯
217	甕	内面 ナデ 外面 タ	黃褐色 褐色	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
218	甕	内面 ナデ 外面 斜めハケからナデ	黄褐色 黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	スス付着 刻目突帯
219	甕	内面 ナデ、ハケからナデ 外面 ナデ	黄白色 タ	1mm以下の砂粒を多く含む	スス付着 刻目突帯
220	甕	内面 ナデ 外面 タ	淡黄色 黄橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
221	甕	内面 ヨコナデ 外面 タ	橙褐色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
222	甕	内面 ナデ 外面 タ	橙黄色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
223	甕	内面 ナデ 外面 タ	黄橙色 タ	1mm以下の砂粒を多く含む	
224	甕	内面 ナデ 外面 タ	赤褐色 タ	1mm以下の砂粒を含む	金雲母 スス付着
225	甕の底部	内面 ナデ 外面 タ	淡灰色 赤橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	
226	甕の底部	内面 ナデ 外面 タ	黄白色 タ	1mm以下の砂粒を多く含む	
227	甕	内面 ハケからナデ 外面 ナデ	橙白色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	突帯
228	甕	内面 一 外面 丁寧なナデ	赤褐色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	突帯、金雲母
229	甕	内面 一 外面 ナデ	赤褐色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	突帯、金雲母
230	甕の底部	内面 ナデ 外面 タテハケからナデ	灰橙色 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	金雲母

第87図 山下第2建設位置図



## 第6章 山下第2遺跡の調査

### 1. 調査の概要（第87図）

本遺跡は車坂・山下遺跡群の中では最も高い位置に立地し、現在の宮崎大学の獣医棟の東側で畑や蜜柑園として利用されていた区域である。そのため、蜜柑を植えた跡や枝や摘果したものを埋め込んだ跡等でかなり攪乱されている。

発掘調査は、平成4年度に、畑の南側2分の1を全面発掘し、平成5年度にその北側を幅4mで調査している。

土層的には耕作面を外すとすぐに赤ホヤ層が検出され、遺構・遺物はこの段階で検出された。赤ホヤ層の下面においては確認トレンチを3箇所に入れたが遺構・遺物の検出はなかった。

赤ホヤ層で検出された遺構は、近世以降の溝状遺構が6条、縄文時代の竪穴住居が3軒・土坑が1基が検出された。

全体に土層の残りが悪く、遺物も表土層直下に最も多く採取されるなど、畑を作る際に旧地形を削り飛ばしているようである。

出土遺物としては縄文時代早期、後期、晚期の土器、石錘、凹石、須恵器、糸切り底の坏等がある。

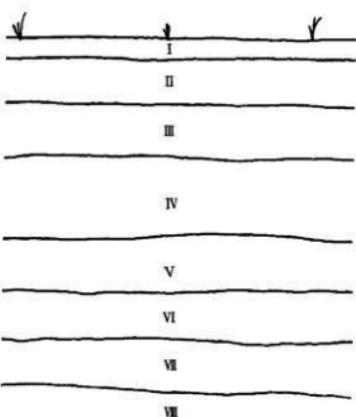
### 2. 層位（第88図）

本遺跡の基本層序は、I層 表土（耕作土）。II層 赤ホヤ層。III層 黄白色ローム層。IV層 黒褐色ローム層。V層 褐色ローム層。VI層 黄白色ローム層。VII層 黒色ブロック混入ローム層。VIII層 シラス層となっている。

本来は、赤ホヤ層の上に黒色土層に入るが、削平及び耕作により失われている。

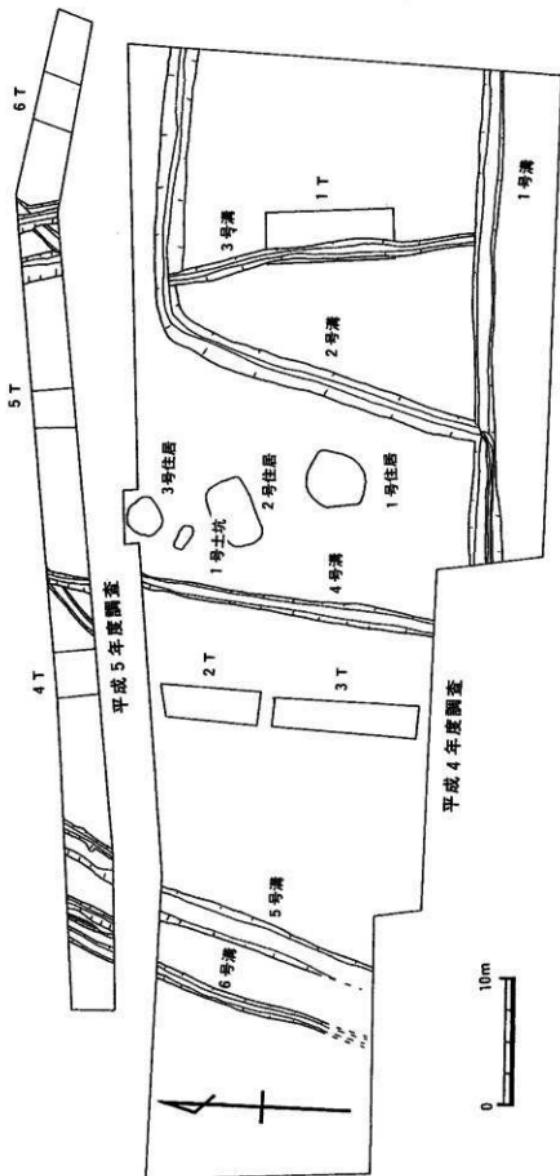
溝状遺構は第III層まで掘り込んでおり、埋土は茶褐色を呈する。

縄文時代の遺構・遺物は、VI層内に掘り込まれた黒色の埋土中で検出された。



第88図 土層図

第89圖 道構配置図



### 3. 遺構（第89図）

遺構としては竪穴住居が3軒と土坑1基が検出された。

遺跡の中央やや東よりに、3軒が南北方向に縦1列にはば等間隔に並んでいる。南側から1号住居、中央を2号住居、北側を3号住居と設定した。2号住居と3号住居の間にある土坑を1号土坑とした。

#### 1号竪穴住居（第90図）

4.5m×4.2mの隅丸方形で、深さ30cm～20cmを残す。

土器片の出土は殆ど見られず、大型の台石状のものや碟片、石錘が8点出土したことが目を引く。石錘は西壁中央に3点が1組となったものが2組で6点、東壁南側で1点、北側で1点の計8点である。

床面から柱穴は検出されなかったが、壁の周囲に直径60cm～30cmのPITが1.8m～2.6mの間隔で回っており、柱穴と思われる。

#### 2号竪穴住居（第90図）

5.2m×3.2mの隅丸長方形で、深さは30cm～20cmを残す。

西壁近くで、深鉢の底部が出土し、他に礫石等が出土した。

床面から柱穴と思われるPITが3隅で検出されたほか、壁の周囲に直径60cm～30cmのPITが1.0m～2.2mの間隔で回っており、柱穴と思われる。

#### 3号竪穴住居（第91図）

直径3mの円形住居で、最大の深さ20cmのスリバチ状の床面である。

遺物は床から浮いた状態で土器片が出土した。

床面から柱穴と思われるPITが中央部で2個検出されたほか、壁の周囲に直径40cm～30cmのPITが1.0m～1.8mの間隔で回っており、柱穴と思われる。

#### 1号土坑（第91図）

2.1m×1.0mの隅丸長方形で、深さは20cmを残す、不明土坑である。

床面から浮いた状態で土器片が出土し、3号住居と同一層の埋土である。

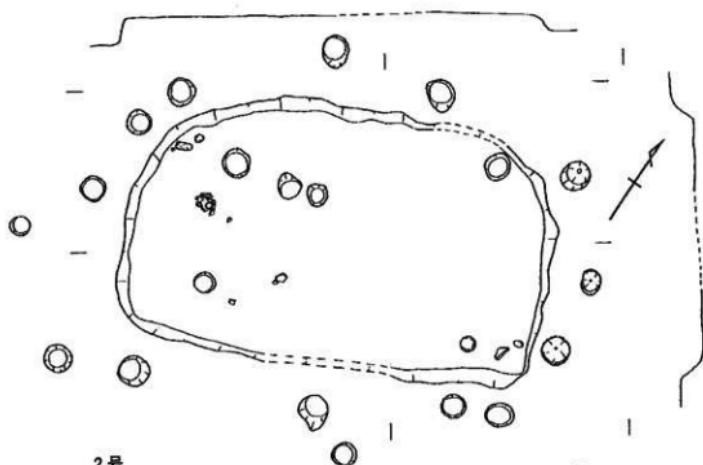
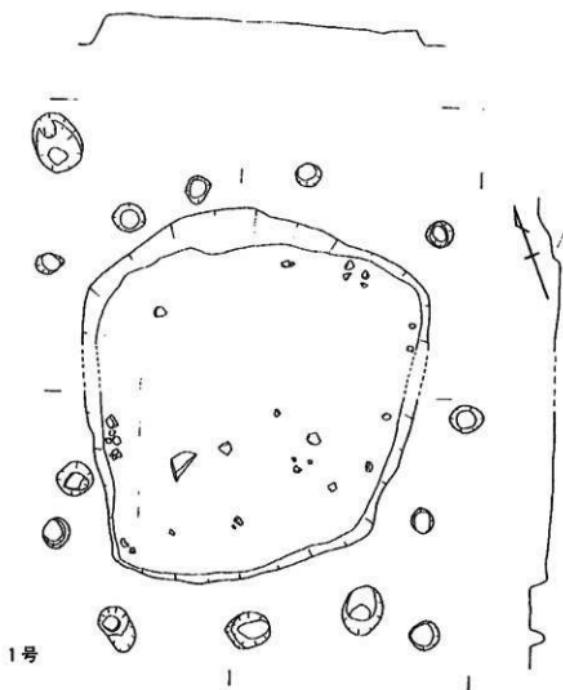
#### その他の遺構

その他の遺構としては、溝状遺構が6条検出された。

1号溝は幅2.1m～1.0mで調査区の南側を東西方向に走っている。

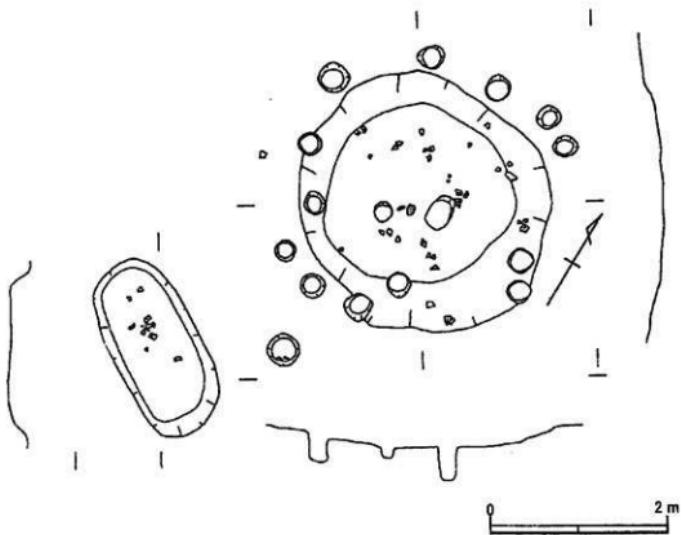
2号溝は幅2mで、調査区北東部から西に向かい、約16mでほぼ直角に南に曲がり、約20mで1号溝に収束する。

3号溝は幅1mで南北に走り、1号溝、2号溝と切り合う。



第90図 1・2号住居実測図





第91図 3号住居、1号土坑実測図

4号溝は調査区の中央を南北に走る溝で、幅1mである。

5号溝は調査区西側で南北に走る幅2mの溝で南側では消滅している。

6号溝は5号溝の西隣にある幅1mの溝で、南北に走っている。

#### 4. 遺物 (第92~95図)

出土した縄文時代の遺物は土器と石器である。

##### A. 土器 (第92~94図)

###### 2号住居出土土器 (第92図)

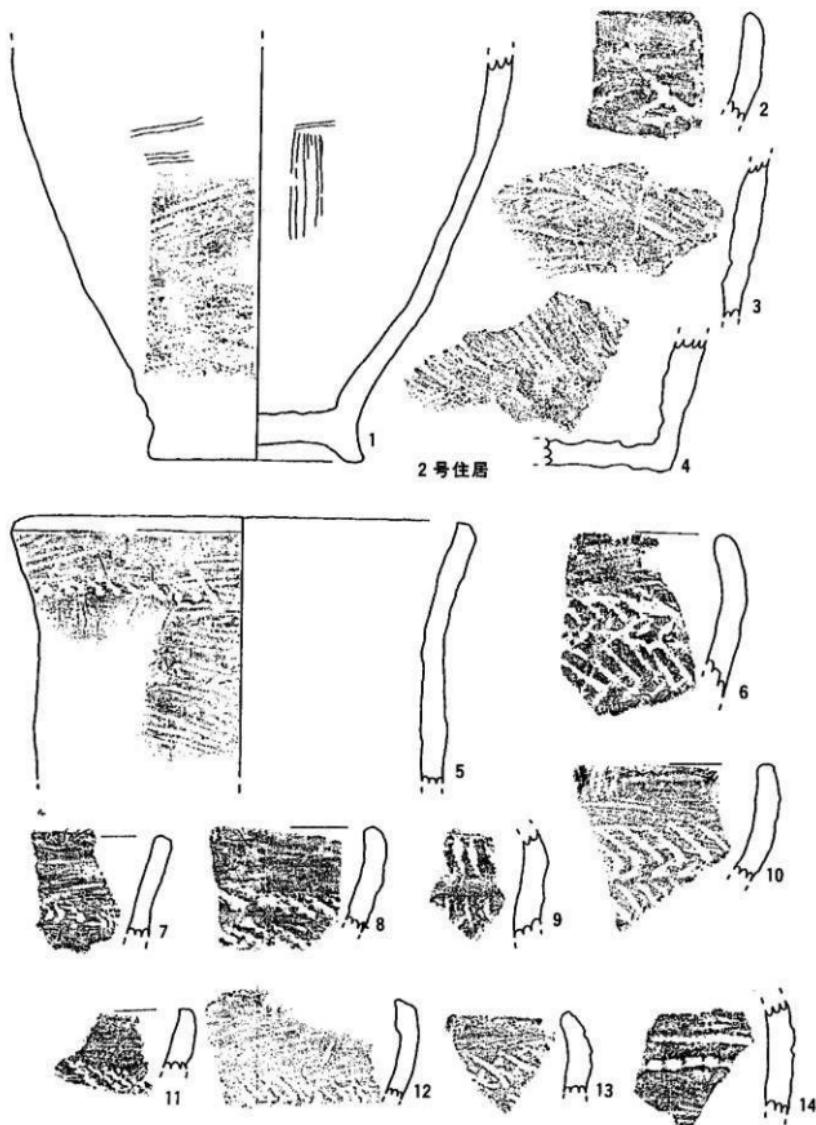
1~4は貝殻条痕の土器である。1、4は底部で、1は上げ底である。2は口縁部で貝殻腹縁の刺突が施される。縄文時代晚期である。

###### 1号土坑出土土器 (第92図)

5~13は貝殻条痕調整後に屈曲部に貝殻腹縁の刺突を施すもので、5、7は1列、6、10は綫衫状、8、9は2列入れている。14は沈線と押引を並行に入れるものである。5~13は縄文時代晚期、13は縄文時代前期であろう。

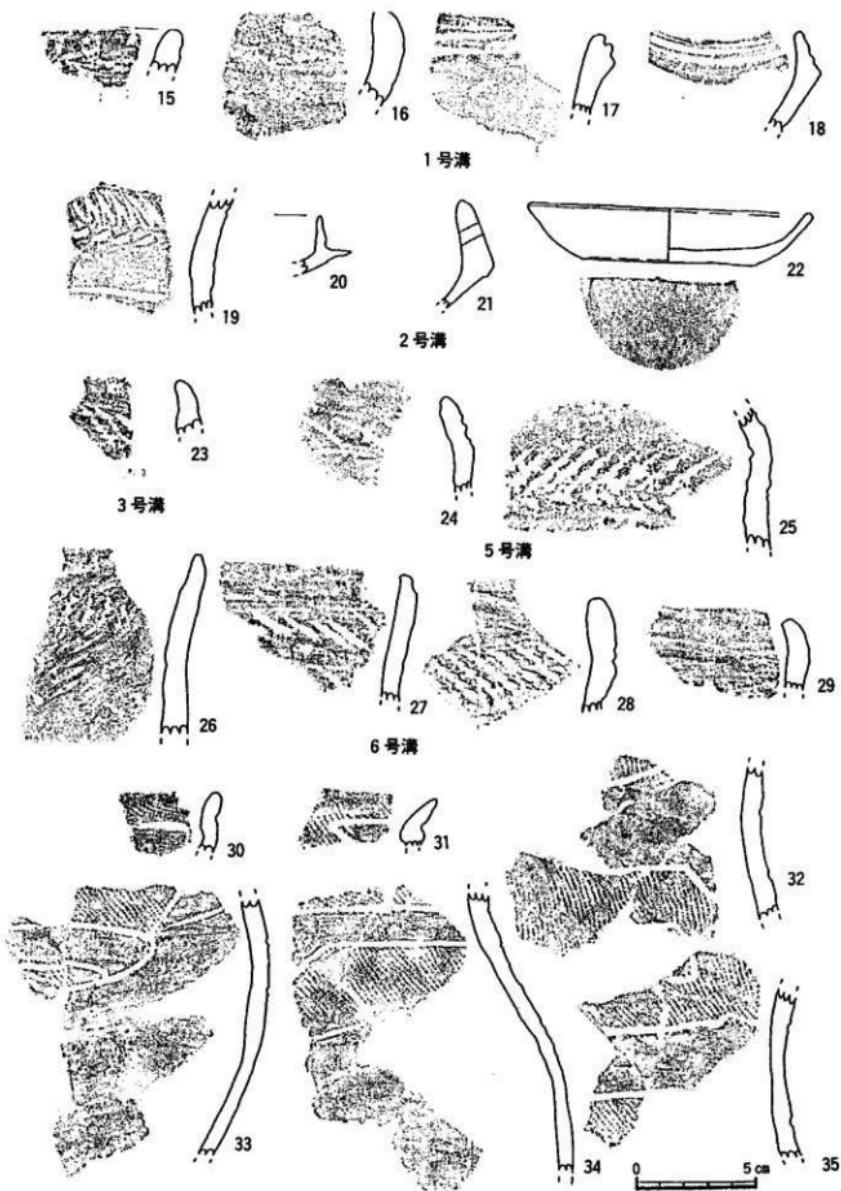
###### 1号溝出土土器 15~18 (第93図)

15、16は貝殻腹縁の刺突が入る縄文時代晚期上器、17は口唇部に2本の沈線が入る縄文時代後期土器、18は口縁部に沈線を入れる弥生時代後期土器である。

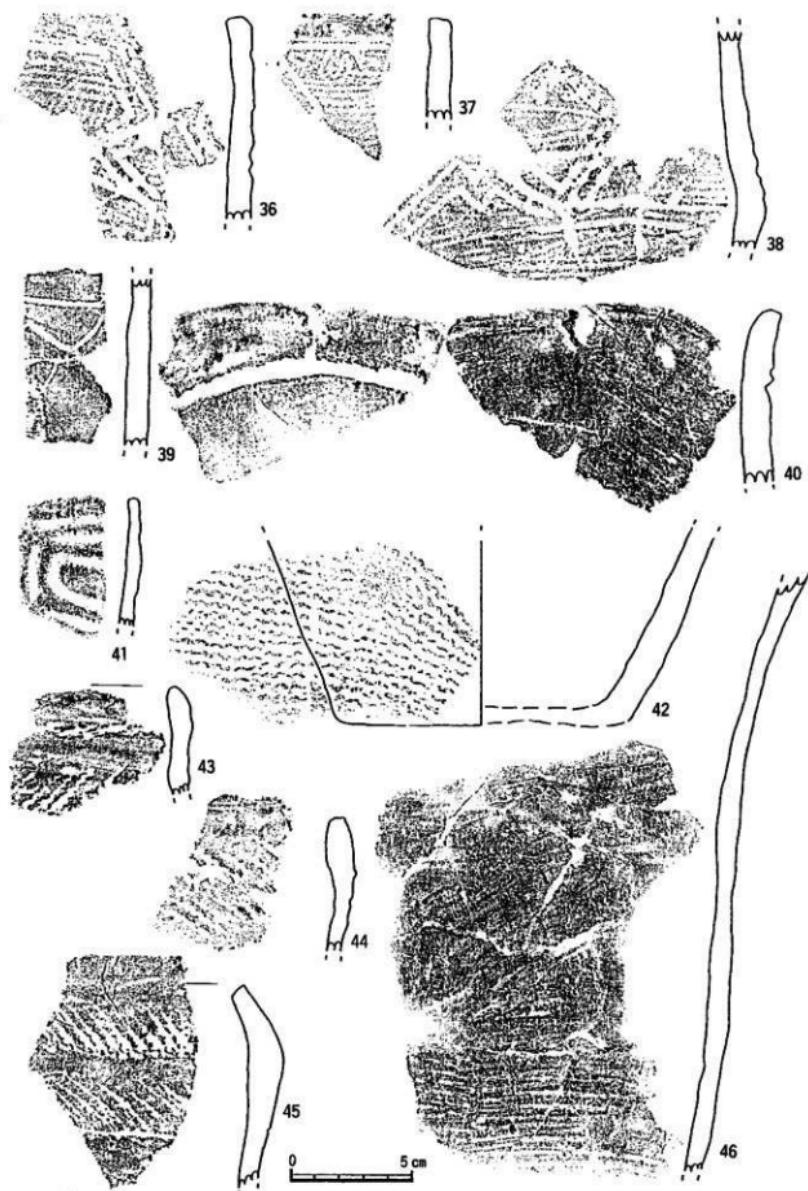


第92図 出土土器実測図

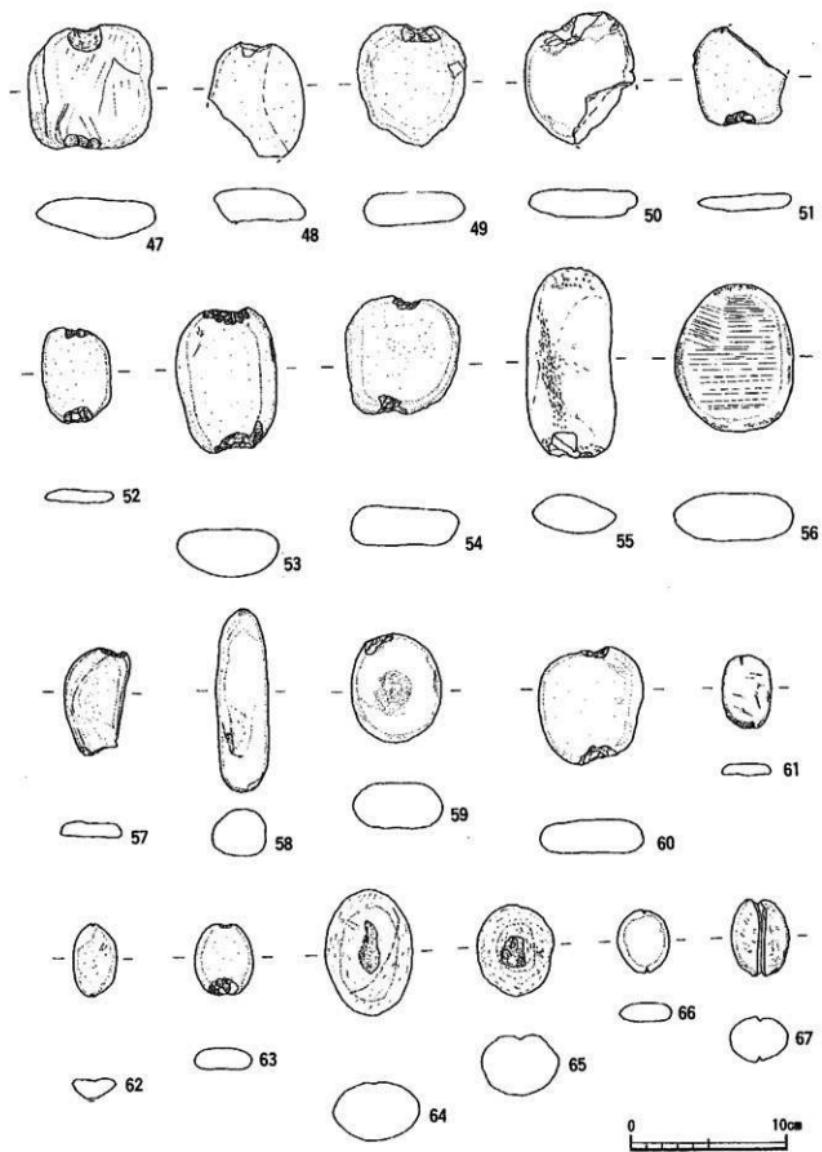
0 5 cm



第93図 出土土器実測図



第94図 出土土器実測図



第95図 出土石器実測図

### 2号溝出土土器 19~22 (第93図)

19は綾杉状の貝殻腹縁文と沈線を入れる縄文時代晩期土器、20は須恵器の坏身で6世紀中葉頃、21は硬質な焼きの土師質土器で近代のもの、22は糸切り底坏だが径が大きく比較的新しいものと思われる。

### 3号溝出土土器 23 (第93図)

23は貝殻腹縁の刺突が入る縄文時代晩期土器である。

### 5号溝出土土器 24、25 (第93図)

24、25は貝殻腹縁の刺突が入る縄文時代晩期土器である。

### 6号溝出土土器 26~29 (第93図)

26~29は貝殻腹縁の刺突が入る縄文時代晩期土器である。

### その他の土器 30~46 (第93・94図)

その他の土器は赤ホヤ層直上の表土混入面における採取土器である。

30~35は同一個体と思われる磨消縄文系の土器で、巻貝による施文と思われる。36~38は同一個体と思われる貝殻条痕の後に沈線と連続押引を2列単位で山形に継横に施すもので縄文時代前期と思われる。39は沈線を横位と山形に施し、40は凹線を1条入れるものであるが時期不明である。41は凹線を幾何学的に施すものだが器壁の薄さから縄文時代後期と思われる。42は縄文時代早期の山形押型文土器である。43~46は貝殻腹縁の刺突が入る縄文時代晩期土器である。

## B. 石 器 (第95図)

石器は、石錐、凹石、蔽石等が出土している。

47~54は1号住居出土の石錐である。

55は大振りの蔽石、56は全体に擦痕のある磨石で、共に2号住居出土である。

57は1号土坑出土のやや変形した石錐である。

58~61は4号溝出土で、58は蔽石、59は蔽石兼用の凹石、60、61は石錐である。

62、63は5号溝出土石錐である。

64は側面に擦痕のある、65は側面に敲打痕の多い、6号溝出土凹石である。

66、67は表土混入面採取の小型石錐である。

石錐の特徴として小型のものに切り目や筋目を入れる事である。

## 5. 小 結

山下第2遺跡の縄文時代晩期の住居について特徴として言えることは、南北に並ぶ事とプランが異なる点であるが、いずれも、土器の出土が少ない点は共通する。なかでも、1号住居から8個の石錘が台石状のものと供伴したことは示唆的である。つまり、1号住居は作業場であった可能性が高いと思われる。また、3号住居はスリバチ状の床で直径2m程度しかない事から、定住用建物とは考えにくく、倉庫的なものか仮の小屋と見るほうが妥当と思われる。このように考えてみると、当遺跡は縄文時代晩期における漁場に近い集落の南端部であるか、漁のための仮住まいの一形式と思われる。

その他の時期や時代については、縄文時代の後期の土器等が出土している事から、宮崎大学構内からの流れ込みの可能性が高いと思われ、遺構部分は大学構内にあると思われる。

山下第2遺跡の調査は12月から1月と年を越したため、西風によって赤ホヤが巻き上げられて、周辺の家や干してある千切り大根に飛び散らないように塩化カルシウムを調査区全体に手分けして撒き、全身が塩でペトペトになったことが今でも思い出される。

第12表 土器観察表

番号	部位	調 整	文 様	色 調	胎 土	備 考
1	肩部～底 部	内面 条痕 外面 ナデ、条痕		淡 タ	1mm以下の砂粒を含む	
2	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	暗赤 暗	微細な砂粒を多く含む	
3	肩 部	内面 ナデ 外面 条痕		暗赤 灰	6mm以下の砂粒を含む	
4	肩 部	内面 一 外面 条痕、ナデ		赤 タ	4mm以下の砂粒を多く含む	
5	口縁部 ～胴部	内面 丁寧なナデ 外面 ナデ	貝殻腹縁による刺突	暗 タ	1mm以下の砂粒を含む	
6	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突、萩杉文	明赤 タ	0.1mm以下の砂粒を含む	
7	口縁部	内面 ハケ 外面 ナデ	貝殻腹縁による刺突	灰 暗	0.2mm以下の砂粒を多く含む	
8	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	橙 タ	砂粒を多く含む	スス付着
9	肩 部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	暗赤 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	
10	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突、萩杉文	明赤 橙	微細な砂粒を含む	
11	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	暗赤 暗	微細な砂粒を多く含む	
12	口縁部	内面 ナデ、条痕 外面 タ タ	貝殻腹縁による刺突	暗赤 タ	0.5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
13	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	暗赤 黒	2mm以下の砂粒を多く含む	
14	肩 部	内面 ナデ 外面 タ	ヘラ状施文具による沈線	暗灰 黄	2mm以下の砂粒を多く含む	
15	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	明赤 橙	微細な砂粒を含む	
16	口縁部	内面 ナデ、ハケ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	赤 暗	微細な砂粒を多く含む	スス付着
17	肩 部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による沈線	暗赤 暗	砂粒を含む	
18	口縁部 ～胴部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による沈線	暗黄 橙	1mm以下の砂粒を含む	
19	肩 部	内面 ナデ 外面 タ	ヘラ状施文具による萩杉文 貝殻腹縁による刺突、沈線	灰 暗	1mm以下の砂粒を含む	スス付着
20	底 部	内面 ナデ 外面 タ		赤 灰	1mm以下の砂粒を含む	須忠
21	口縁部	内面 丁寧なナデ 外面 タ		暗 橙	微細な砂粒を含む	穿孔あり 上師
22	口縁部 ～底部	内面 ナデ 外面 タ		黄 橙	1mm以下の砂粒を含む	糸切底
23	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	暗 橙	1mm以下の砂粒を多く含む	
24	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	暗 橙	2.5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
25	肩 部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突、萩杉文	橙 タ	4mm以下の砂粒を含む	
26	口縁部	内面 ナデ 外面 条痕	貝殻腹縁による刺突	暗赤 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
27	口縁部	内面 ナデ 外面 条痕	貝殻腹縁による刺突	暗 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	
28	口縁部	内面 条痕ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による刺突	暗 橙	4mm以下の砂粒を含む	

番号	部 位	調 整	文 样	色 調	胎 上	備 考
29	口縁部	内面 ナデ 外面 条痕後ナデ	貝殻腹縁による刺突	暗 橙 *	2mm以下の砂粒を多く含む	
30	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	磨消繩文	暗 赤 紅 暗 紅	2mm以下の砂粒を多く含む	
31	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	磨消繩文	暗 赤 紅 暗 紅	5mm以下の砂粒を多く含む	
32	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	磨消繩文	暗 黄 橙 *	7mm以下の砂粒を多く含む	
33	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	磨消繩文	赤 紅 暗 紅	5mm以下の砂粒を多く含む	
34	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	磨消繩文	暗 紅 *	5mm以下の砂粒を多く含む	
35	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	磨消繩文	暗 紅 タ	6mm以下の砂粒を含む	
36	口縁部	内面 条痕後ナデ 外面 細、横の条痕	ヘラ状施文具による連続押引	灰 黄 黄 灰	砂粒を多く含む	
37	口縁部	内面 条痕後ナデ 外面 条痕	ヘラ状施文具による沈線	暗 黄 橙 黄	砂粒を含む	
38	胴 部	内面 条痕後ナデ 外面 ナデ	ヘラ状施文具による沈線	灰 黄 黄 灰	0.3mm以下の砂粒を含む	
39	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	ヘラ状施文具による沈線	暗 赤 紅 暗 紅	0.5mm以下の砂粒を含む	スス付着
40	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	凹 線	暗 赤 紅 暗 紅	4mm以下の砂粒を含む	
41	口縁部	内面 一 外面 ナデ	凹 線	明 紅 暗 紅	0.1mm以下の砂粒を多く含む	
42	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 橙 赤 紅	4.6mm以下の砂粒を多く含む	
43	口縁部	内面 ナデ 外面 条痕後ナデ	貝殻腹縁による刺突	暗 *	2.5mm以下の砂粒を多く含む	
44	口縁部	内面 条痕後ナデ 外面 ナデ	貝殻腹縁による刺突	暗 赤 灰 赤 灰	1.5mm以下の砂粒を含む	
45	口縁部	内面 ナデ 外面 タ、条痕	貝殻腹縁による刺突、沈線	明 赤 紅 *	3.5mm以下の砂粒を含む	
46	胴 部	内面 条痕後ナデ 外面 タ		暗 赤 紅 タ	0.4mm以下の砂粒を多く含む	

第13表 石器觀察表

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
47	石錐	7.7	7.6	2.5	260	砂岩	
48	石錐	7.0	6.1	2.0	112	砂岩	
49	石錐	7.75	6.5	2.1	160	砂岩	
50	石錐	8.3	7.0	1.7	130	砂岩	
51	石錐	6.2	5.89	0.95	50	砂岩	
52	石錐	6.1	4.4	0.7	35	砂岩	
53	石錐	9.14	6.4	3.05	285	砂岩	
54	石錐	7.5	7.0	2.5	210	砂岩	
55	敲石	12.0	5.3	2.3	260	安山岩	
56	磨石	9.3	7.6	3.0	350	安山岩	
57	石錐	6.8	3.95	0.9	50	砂岩	
58	敲石	11.25	3.3	2.9	70	砂岩	
59	凹石	6.9	5.6	2.9	160	砂岩	
60	凹石	7.5	6.7	2.1	170	砂岩	
61	石錐	4.6	3.1	0.75	20	頁岩	
62	石錐	4.15	2.25	1.2	25	砂岩	
63	石錐	4.5	3.2	1.3	35	砂岩	
64	凹石	8.0	5.6	3.6	205	安山岩	
65	凹石	5.8	5.0	3.5	140	玄武岩	
66	石錐	4.0	3.3	1.2	25	砂岩	
67	石錐	4.9	3.8	2.9	60	砂岩	

第96図 山下第3遺跡位置図



## 第7章 山下第3遺跡の調査

### 1. 調査の概要（第96図）

本遺跡は、山下第2遺跡の西に隣接する畠から南に傾斜して行く斜面の部分で、中央部に1段のテラスがあり、西側は入り込み谷に面している。

調査は平成5年度に東側3分の1、平成6年度に西側の残り3分の2と分割して行った。

平成5年度の調査では、北側斜面では近世以降の溝状遺構が東西方向と南北方向に複数見られた。また、テラス部分では大きな溝状の窪みが見られただけであった。

平成6年度の調査は、全体をテラス南部、テラス北部、北側斜面に3分割した。テラス南部で集石遺構2基、不明土坑2基を検出し、テラス北部では若干の土器と石器を検出し、北側斜面で集石遺構3基、溝状遺構、落とし穴1基が検出された。

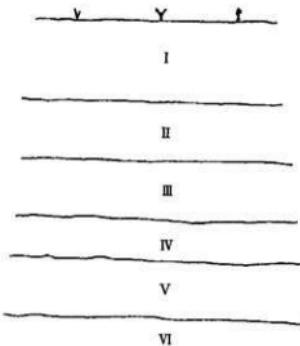
遺物としては、縄文時代後期・晩期、弥生時代中期、平安時代の土器、縄文時代の石器が出土しているが、斜面下部からテラス北部の黒色土出土で、その殆どは遺構に伴わない流れ込み状態であった。

### 2. 層位（第97図）

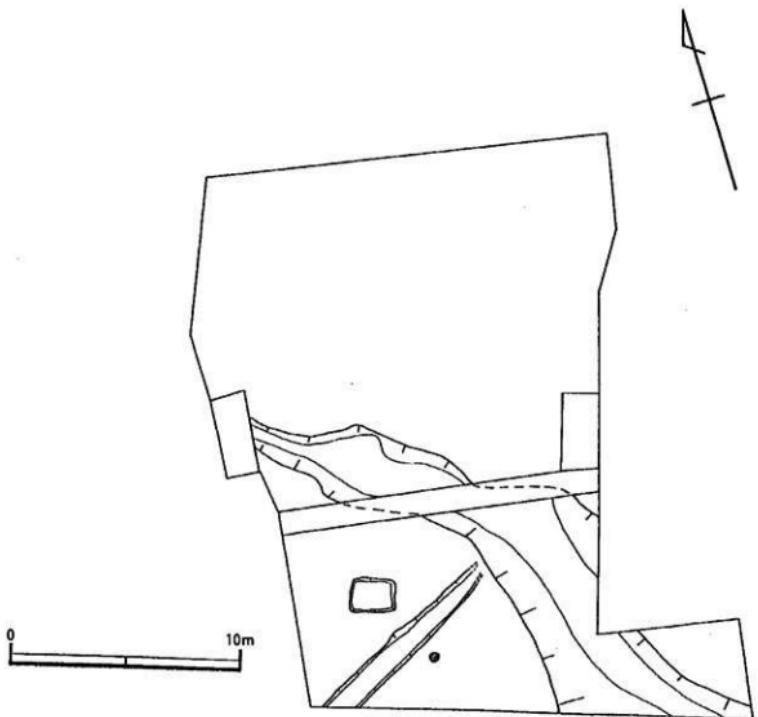
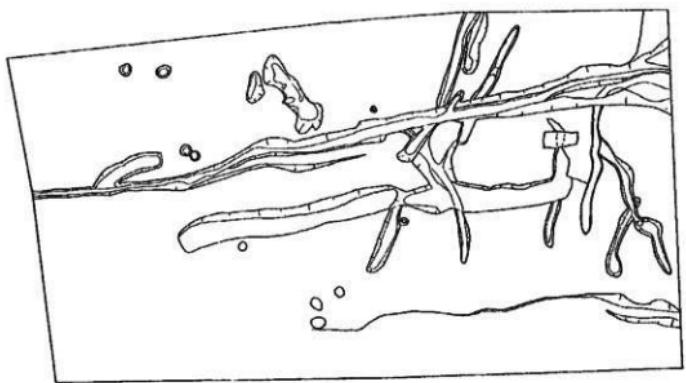
本遺跡の基準層序は、I層 表土（耕作土）。II層 黒色土。III層 赤ホヤ層。IV層 黄白色ローム層。V層 黒褐色ローム層。VI層 黄褐色ローム層である。

北側斜面では赤ホヤ層から黒褐色ローム層が削平されており、テラス部では黒色土や赤ホヤ層が厚く流れ込み状に堆積している。

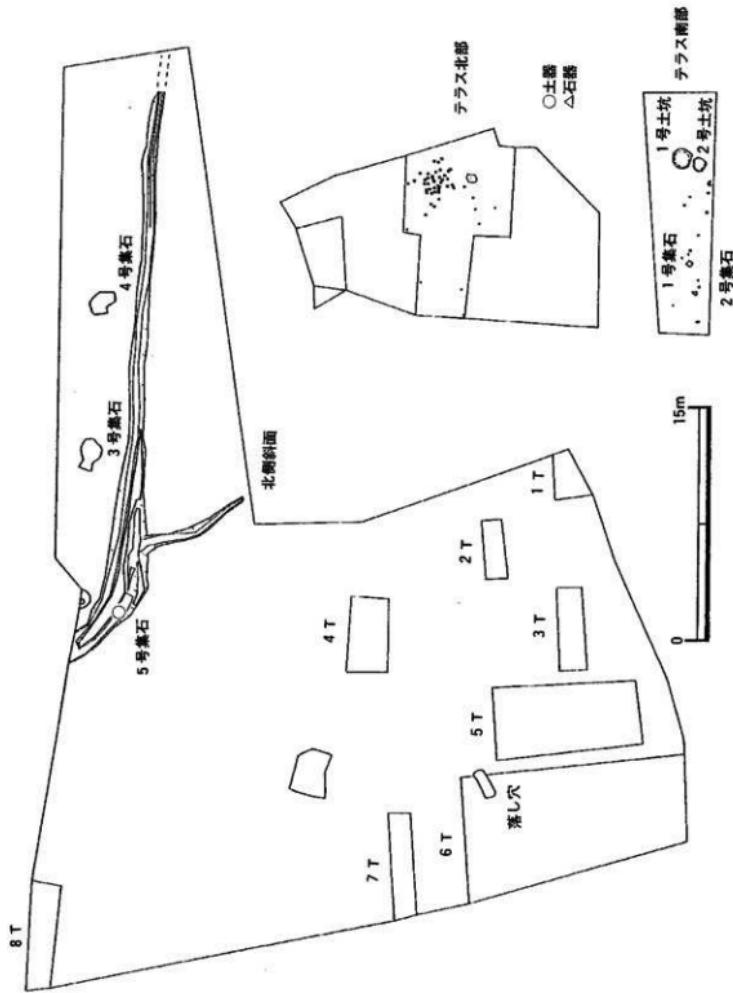
集石遺構は、VI層で検出された。  
落とし穴は赤ホヤ層の上から掘り込まれていた。



第97図 土層図



第98図 平成5年度調査区図



第99図 平成6年度調査区図

### 3. 造構（第98・99図）

造構としては溝状造構、集石造構が5基、落し穴1基、土坑2基が検出された。

#### 溝状造構

溝状造構は北側斜面に東西方向に走るもののが3条、南北方向のものが5条検出された。

南北方向のものは何れも削平が進み原型が不明である。東西方向のものは最も北側にある溝の残りが良い他は、かなり削平されている。西側屈曲部に集石部が認められた。

遺物は近世造構の瀬戸物や碟である。

#### 集石造構（第100図）

テラス南部検出の集石を東から1号、2号、北側斜面検出の集石を西から3号、4号、溝内部の集石を5号とした。

1号集石は石の密集度は強いが、25cm×35cmの小範囲のもので、掘り込みを持たないものである。

2号集石は石の密集度が弱く、35cm×35cmの小範囲のもので、掘り込みを持たないものである。

3号集石は石が密集し、2m×1.4m、厚み30cmのものだが、掘り込みを持たないものである。

4号集石は石が密集し、1.8m×1.3m、厚み25cmのものだが、掘り込みを持たないものである。

5号集石は溝の底部に流れ寄った形で検出され、1m×0.4m範囲に1層の堆積である。

このうち、1・2号集石と3・4号集石のかけ離れた形態差の原因は不明である。

#### 落し穴（第101図）

落し穴は、北側斜面西部のテラスと斜面の変換部分に掘られており、1.9m×0.7m、深さ1mを計る。底部の中心線に4カ所逆木を埋め込んだ跡が検出され、穴の大きさは直径7cm～10cm、深さ約25cmを計る。

#### 土坑（第101図）

土坑はテラス部に2基並んで検出され北側を1号、南側を2号とした。

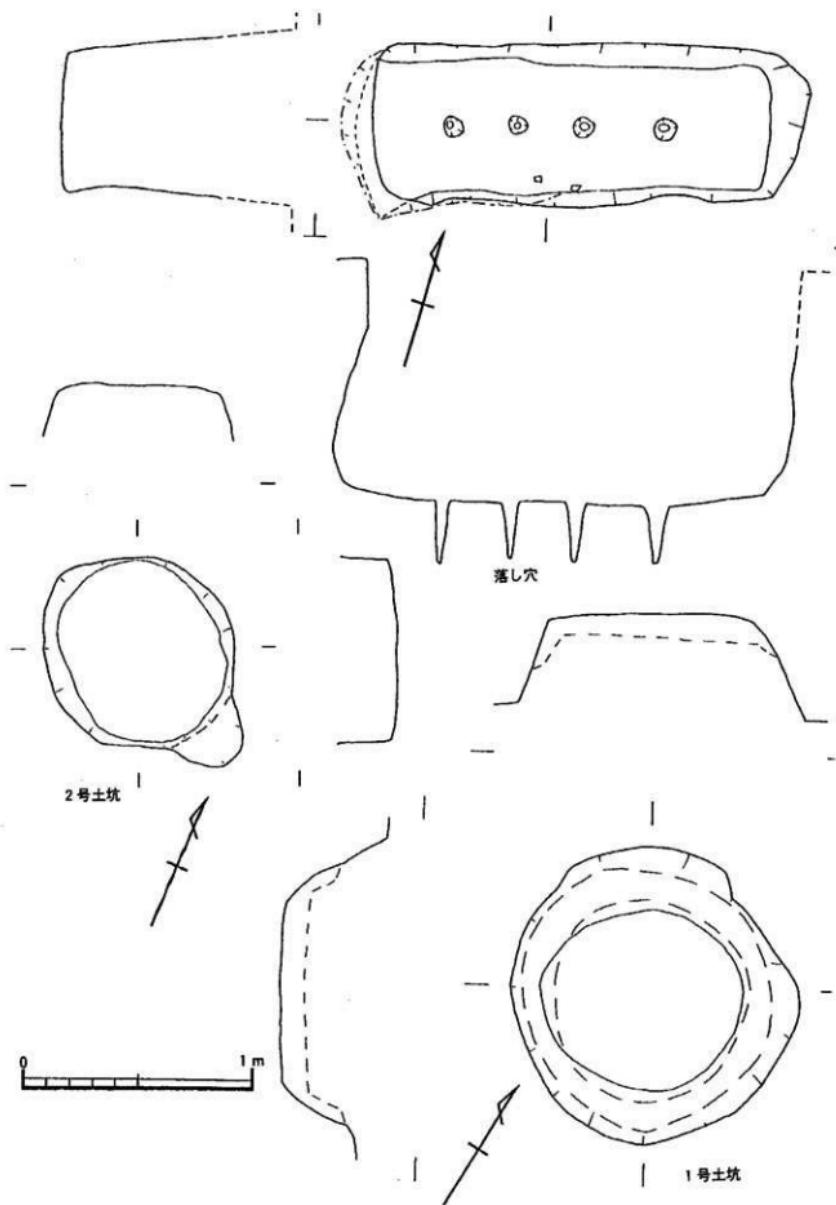
1号土坑は、直径1.25m、深さ45cmと大型で、内部に白色粘土が10cmの厚みで張ってある。

2号土坑は、直径8.5m、深さ25cmの土坑である。

共に用途は不明である。



第100図 集石遺構実測図



第101図 落し穴、1・2号土坑実測図

#### 4. 遺物（第102～104図）

出土した縄文時代の遺物は土器と石器であり、大半がテラス部からの検出である。

その他の時代の遺物も殆どがテラス部の黒色土からの検出である。

##### A. 土器（第102・103図）

出土した土器は複数の時代の土器である。

1～3はテラス南部で出土した土器で、1は竹管による沈線と一部に貝殻擬縄文が見られる縄文時代後期の土器、2、3は弥生土器の壺の一部である。

4～9はテラス部出土で、4は土器片錐、5～7は貝殻腹縁を刺突する縄文時代晚期土器、8は黒色磨研の縄文時代晚期の浅鉢、9は弥生中期の壺の口縁である。

10～45は斜面の黒色土出土の土器である。

10は撚糸文の平柄式土器。

11～15は凹線文に口縁端に太い刻みを入れ凹線を入れる縄文時代中期土器。

16～23は縄文時代後期の土器で、16は貝殻擬縄文と口縁端に太い刻み、17は磨消縄文系土器だが貝殻擬縄文のもの、18は貝殻腹縁刺突文だが擬縄文の一部と思われる。19、20は条痕をナデ消した後に凹線を入れるもの、21、22は口縁端に竹管による刺突を施し、胴部は条痕をナデ消した後に沈線を巡らすもの、23は口縁端に爪型の刺突を入れるものである。

24～29は貝殻腹縁の刺突を施す縄文時代晚期土器。

30～32は弥生時代中期の断面台形の口縁の壺。

33～35は土師器の壺の口縁部。

36、37は布痕土器。

38～43はヘラ切り底の壺で、口縁部は直線的に延びる。44、45は充実高台の壺底部である。

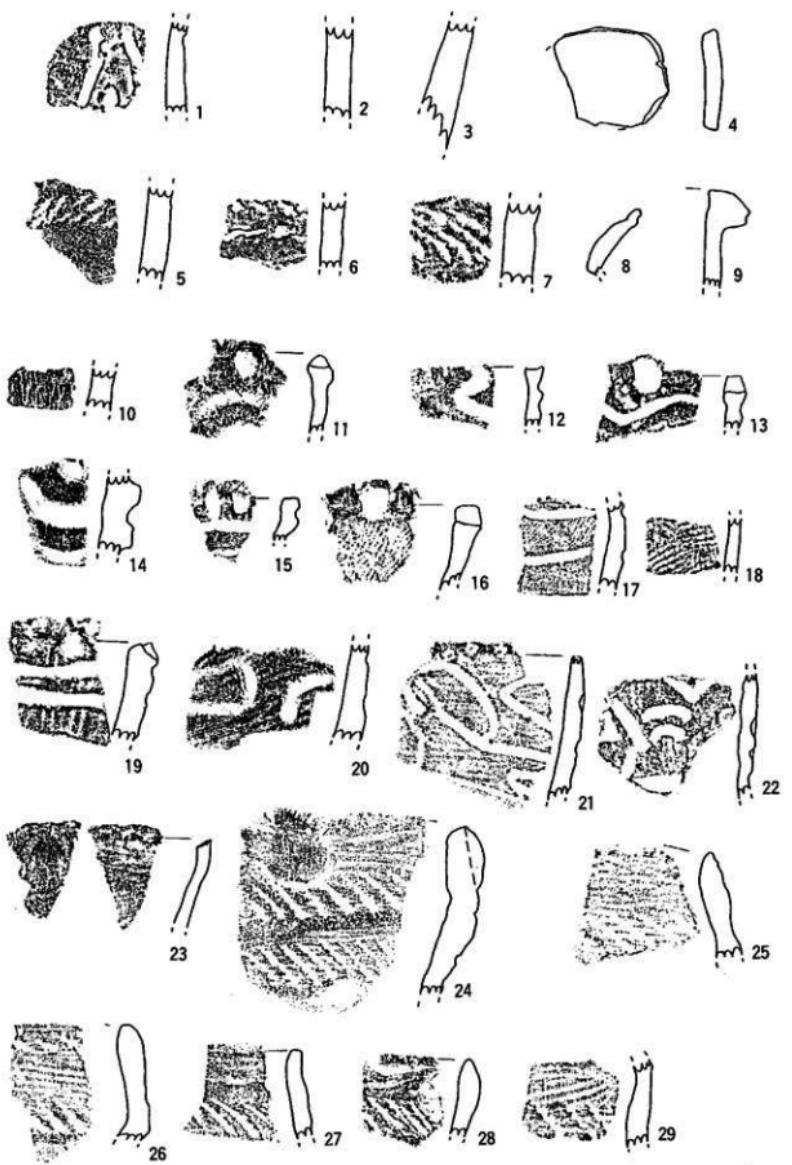
##### B. 石器（第103・104図）

46、47は確認トレンチ出土の石器で46は磨石、47は石斧の胴部である。

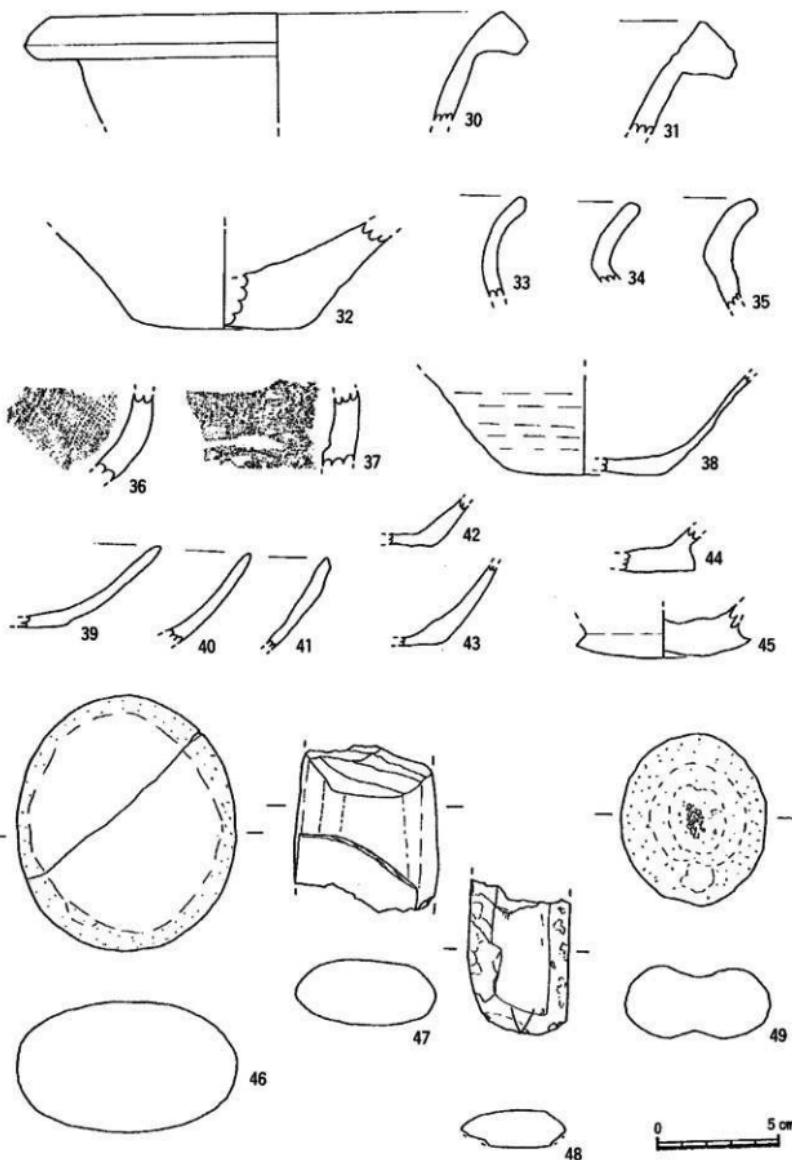
48は石斧の刃部片で片擦れしており縦斧と思われる。

49、50は凹石で、49は両面が強く窪んでおり周縁は敲打痕が明瞭なもの、50は中央が窪むほかは平で擦痕が有り磨石としても使用されている。

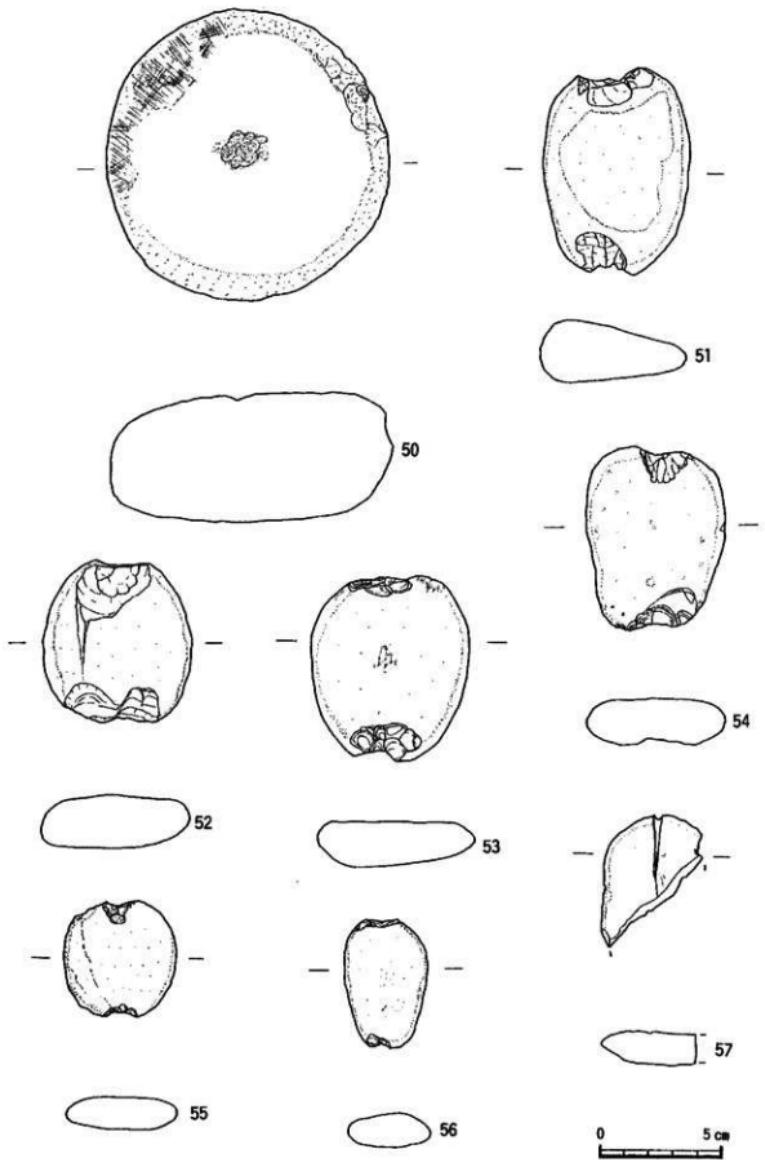
51～57は中型・小型の石錐で、57は切目石錐である。



第102図 出土土器実測図



第103図 出土遺物実測図



第104図 出土石器実測図

## 5. 小 結

山下第3遺跡は比較的広い範囲の調査であったが、遺物等の少ない遺跡であった。丘陵下の南向きテラスにおいては、縄文時代以降近世まで殆ど利用されていないことは、土地利用のあり方が単に方位だけで決まる訳でなく、比高や面積等の諸条件によるためと思われる。また、落し穴がテラス部にあることは獣場としての意味合いが強いのではないだろうか。

集石について見ると、テラス南部の集石は小型で礫の数も僅かのものであるが、斜面上部の集石は、大型で多量の礫を含むものである。この差は理解し難いが、1つは単なる時期差として捉える事が出来、もう1つは立地差による住居域での集石と獣場での臨時的な集石との差として捉える事が考えられる。

本遺跡は丘陵南側斜面の流れ込みの調査という形で終わってしまったが、内容的には、縄文時代の中期～後期の土器に連続性を感じられた。そこで、その本体の在り方が興味深いが、残念ながら宮崎学園都市遺跡群の中では発掘調査されておらず実態が不明である。今後の課題として又残ってしまった。

この山下第3遺跡の調査が終わった時には既に過去5年間に調査し終えた部分は宅地化し旧状は全く解らない様になっており、湧き水のあった入り込み谷は埋められ、畑や林が姿を消し、アパートや家が林立する街になっており軽い虚脱感を覚えたものだった。

第14表 土器観察表

番号	部 位	調 整	文 样	色 調	胎 土	備 考
1	胴 部	内面 ナデ	-	茶 橙 色	1mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	貝殻腹縁の刺突、竹管による沈線	タ			
2	胴 部	内面 傷痕からナデ	-	赤 橙 色	1mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	角の剥離からナデ	タ			
3	胴 部	内面 研磨	-	赤 橙 色	1mm以下の砂粒を含む	甕
	外面 タ	-	タ			
4	-	内面 ナデ	-	黄 橙 色	2mm以下の砂粒を含む	土器片種 黒雲母
	外面 タ	-	タ			
5	胴 部	内面 条痕	-	赤 橙 色	1mm以下の砂粒を含む	
	外面 ナデ	貝殻腹縁の刺突	タ			
6	胴 部	内面 条痕からナデ	-	茶 橙 色	1mm以下の砂粒を含む	
	外面 ナデ	貝殻腹縁の刺突	タ			
7	胴 部	内面 ナデ	-	茶 橙 色	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	貝殻腹縁の刺突	タ			
8	口縁部	内面 -	-	淡 黒 色	0.5mm以下の砂粒を含む	黑色磨研 浅鉢
	外面 研磨	-	タ			
9	口縁部	内面 ナデ	-	赤 橙 色	2mm以下の砂粒を多く含む	甕・金芸母
	外面 タ	-	タ			
10	胴 部	内面 ナデ	-	黄 橙 色	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	燃 糸	タ			
11	口縁部	内面 ナデ	-	暗 橙 色	3mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	凹線、口唇部に刺突	暗 橙 色			
12	口縁部	内面 ナデ	-	黄 橙 色	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	竹管による沈線	タ			
13	口縁部	内面 ナデ	-	灰 黄	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	竹管による沈線	タ			
14	胴 部	内面 ナデ	-	明 赤 橙 色	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	竹管による沈線	暗 赤 橙 色			
15	口縁部	内面 ナデ	口唇部に刻目	黄 灰	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	竹管による沈線	暗 灰 黄			
16	口縁部	内面 ナデ	口唇部に刺突	褐	5mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	縦 文	暗 褐			
17	胴 部	内面 ナデ	-	暗 赤 褐	4mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	崩落縞文、竹管による沈線	褐			
18	胴 部	内面 ナデ	-	黄 白	3mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	卷貝による回転押圧	タ			
19	口縁部	内面 条痕後ナデ	-	赤 橙	1mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	竹管による沈線	タ			
20	胴 部	内面 条痕	-	褐	1mm以下の砂粒を含む	
	外面 条痕後ナデ	凹線	赤 褐			
21	口縁部	内面 ナデ	口唇部に竹管文	暗 黄 橙 色	3mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	竹管による沈線	暗 橙 褐			
22	胴 部	内面 ナデ	-	褐	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
	外面 タ	竹管による沈線	タ			
23	口縁部	内面 ナデ	口唇部に刻目	明 赤 褐	1.5mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	爪形刺突	褐			
24	口縁部	内面 ナデ	-	明 赤 褐	8mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	貝殻腹縁による連続刺突文	橙			
25	口縁部	内面 条痕後ナデ	-	明 赤 褐	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	-	橙			
26	口縁部	内面 条痕後ナデ	-	明 橙	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
	外面 タ	-	タ			
27	口縁部	内面 ナデ	-	明 赤 褐	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 条痕後ナデ	-	橙			
28	口縁部	内面 ナデ	貝殻腹縁による押圧	赤 橙	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	-				
29	胴 部	内面 条痕後ナデ	-	暗 赤 橙	2mm以下の砂粒を含む	
	外面 タ	貝殻腹縁による刺突	橙			

番号	部 位	調 整	文 様	色 調	胎 土	備 考
30	口縁部	内面ナデ 外面タ		明赤褐色 タ	0.5mm以下の砂粒を多く含む 壺	
31	口縁部	内面ナデ 外面タ		明赤褐色 タ	3mm以下の砂粒を含む 壺	
32	胴～底部	内面ナデ 外面タ		明赤褐色 タ	4mm以下の砂粒を多く含む 壺	
33	口縁部	内面ナデ 外面タ		淡赤橙 タ	4mm以下の砂粒を多く含む 壺	
34	口縁部	内面ナデ 外面タ		黒 橙	3.5mm以下の砂粒を含む スヌ付着	
35	口縁部	内面ナデ 外面タ		褐色 明赤褐色	3mm以下の砂粒を含む 壺	
36	胴 部	内面布痕 外面ナデ		橙	2mm以下の砂粒を含む	
37	胴 部	内面布痕 外面ナデ		暗橙	4mm以下の砂粒を含む	
38	胴～底 部	内面ナデ 外面タ		黄 白	4mm以下の砂粒を多く含む 壊	
39	口縁部 ～底部	内面ナデ 外面タ		淡赤橙 明黄褐色	2mm以下の砂粒を含む 壊	
40	口縁部	内面ナデ 外面タ		橙	2mm以下の砂粒を含む 壊	
41	口縁部	内面ナデ 外面タ		橙	砂粒を含む 壊	
42	胴～底 部	内面ナデ 外面タ		暗 タ	2mm以下の砂粒を含む 壊	
43	胴～底 部	内面ナデ 外面タ		橙 タ	3mm以下の砂粒を含む 壊	
44	胴～底 部	内面ナデ 外面タ		黄 タ	1.5mm以下の砂粒を含む 壊	
45	底 部	内面ナデ 外面タ		灰 淡	2mm以下の砂粒を含む 壊	

第15表 石器観察表

番号	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
46	磨 石	10.5	9.1	5.3	750	安山岩	
47	石 斧	6.7	5.7	2.6	140	頁岩	
48	石 斧	5.5	4.3	1.1	60	頁岩	
49	凹 石	6.9	5.9	2.9	155	玄武岩	
50	敲 石	11.9	11.5	4.9	1,060	砂岩	
51	石 锤	8.4	6.0	2.6	170	砂岩	
52	石 锤	6.75	6.1	2.2	115	砂岩	
53	石 锤	7.6	6.5	1.8	130	砂岩	
54	石 锤	7.5	6.0	1.9	120	安山岩	
55	石 锤	4.7	4.5	1.3	40	砂岩	
56	石 锤	5.2	3.4	1.4	30	頁岩	
57	石 锤	5.4+α	3.9+α	12.0	30	頁岩	

## 第8章 まとめ

車坂・山下遺跡群は宮崎学園都市遺跡群の南側の端に位置する。丘陵の縁辺部という条件からすると、成果は思ったよりも大きかった。

### 1. 縄文時代

縄文時代早期の特徴は、車坂遺跡群の焼礫層と押型文土器、山下第1遺跡の一連の土器群である。さらに、山下第2遺跡、第3遺跡の早期土器の欠如、吉田式土器の欠落である。

車坂第3遺跡における焼礫層は、旧地形がセクション確認では平と判断される遺跡の北側3分の1から出土しておらず、意図的に丘陵南斜面寄りの平坦部を利用したと考えられる。ここで問題となるのは集石の用途と層を成す焼礫群の意味で有る。このことは、早期の居住の在り方と深い関係が有るため概に言えるものではないが、焼礫層の考察を若干加えてみたい。

縄文時代早期に普遍的とも言える状況で出土する集石は、通常「炉」としての機能を考えられているが、その中の疑問を列記してみる。

1. 石は何處から持ってくるのか。
2. 砂岩がその大部分が占めているなかで、どれほどの耐久性が有るのか。
3. どれほどの頻度で利用したのか。
4. 一度に使う燃料はどれほどであるのか。
5. 掘り込みを持ち直径1mを越す集石に、石が詰まったままの状態で、何故その上に30cm以上もの焼礫層が、土器片や石器等を含んで載っているのか。
6. その焼礫等は何處から来たものか。

等である。

1については、山下第3遺跡の西隣に礫層の露頭があり、比較的近場で入手可能な事が判明した。従って、石の補充には困難は無いと思われる。

2の耐久性であるが、多くの集石造構は集石部分と散石部（破碎礫）から成っている事から、同じ集石を石を換えながら繰り返し使用した事は想像できる。逆に言えば、掘り込みを持つものは石を換える事で、かなり長期に使えるものと考えられる。石自体の耐久性については、火力や使用法でかなりの差があると思われる。

3については現状では何とも言い難いが、車坂第3遺跡のように土器型式の少ない遺跡でも2型式存在する事は、縄文時代早期の長いスパンを考え合わせるとさほどの使用頻度は無いと思われる。

- 4については直径1m、深さが30cm程度のものの使用量は知れているだろう。

5は、掘り込みを持つ集石の上に遺物が堆積するという事であるから、その集石の遺棄と判断出来よう。

集石の石がそのままの形で検出されるという事は、集石の利用法の一つは、集石の表面だけを

利用するものと考えられる。最も、集石の本來の姿が今発掘で検出されたものと異なっていれば話は別である。

6についてでは、隣接区に焼砾層の薄い集石がある事、焼砾層上部に集石と明確に判断される遺構がなかった事から、別の場所から持つて来て捨てたものと、集石を一旦は作るが使用後に石を外し、その形を破壊して廃棄されるものとが混じり合っているのではないだろうか。

又、5・6を考え併せると、集石廃棄に2つの形が考えられ、更に、台地の利用に集石を設置する段階と、古い集石を埋めて焼砾層を形成する段階があると思われる。最初の段階には生活（居住）空間として利用し、次の段階では隣接地に居住空間が有り旧集石部を廃棄物処理所としているようである。

次に土器について見ると、車坂遺跡群の押型文土器は次の特徴がみられる。

車坂第1遺跡では外面縦走押型に内面横走押型、外面押型に内面無文

車坂第2遺跡では外面横走押型に内面原体条痕・横走押型、外面押型に内面無文

車坂第3遺跡では1区に外面横走押型に内面原体条痕・横走押型、2区に外面横走押型に内面原体条痕・横走押型と外面縦走押型に内面原体条痕・横走押型、外面押型に内面無文

このうち内外面とも横走押型に内面原体条痕のものは早水台式、外面縦走押型に内面原体条痕・横走押型のものは下菅生B式に比定されよう。

車坂第3遺跡の在地系土器の主体は桑ノ丸式土器類と下剥峰式土器類であり、押型文土器と混在した形で出土する事から、この2土器類と早水台式、下菅生B式とが、並行関係に有るのか、先後関係に有るのかが問題として残された。

## 2. 弥生時代

車坂・山下遺跡群では、枝丘陵にのる山下第1遺跡に11軒の住居群が存在し、小さな入り込み谷を挟んで東にある本丘陵南端の車坂遺跡群では、竪穴状遺構を含め12軒の住居群が存在する。

山下第1遺跡が弥生時代中期後半から後期前葉、車坂第1遺跡で中期後半から後期前半、車坂第2遺跡で中期後半と後期後半、車坂第3遺跡で中期後半と後期後半の時期である。それぞれの遺跡には円形住居と方形住居、間仕切住居が存在する。山下第1遺跡の住居が一連の住居群で有るのに対し、車坂遺跡群は2時期に分かれるのが特徴である。

学園都市遺跡群の中の、堂地東遺跡、前原北遺跡、熊野原遺跡は丘陵中央から北側の範囲にある間仕切住居を持つ遺跡である。堂地東遺跡は後期初頭～前葉の円形プランと方形プランの間仕切住居を中心とし、方形プラン住居が共存する遺跡である。熊野原遺跡は後期後半～末の円形プランと方形プランの間仕切住居を中心とし、方形プラン住居が共存する遺跡である。前原北遺跡は弥生時代終末～古墳時代初頭の方形プランの間仕切住居と方形プラン住居が共存する遺跡である。これらの遺跡と車坂遺跡群を比較すると、円形と方形の間仕切住居と、方形プラン住居が共存する事は同様であるが、方形プラン住居が4軒と比率が高いのが特徴である。また、山下第1遺跡と比較すると、円形プラン自体が3軒中1軒しか無く、残りは方形プランの間仕切住居が通常の方形住居である。車坂遺跡群は調査面積が少ない欠点はあるが、山下第1遺跡と共に、丘陵

北側の遺跡とやや様相を異にしている。同一丘陵上に異なる構成を持つ住居群が区域を別に存在する事は、分業制若しくは階層分化等の集落間の差を示すものと考えたい。

さらに、山下第1遺跡では円形の12号住居が径約9m×8mと突出している点と、方形プランの1号住居～7号住居が南北方向に縦に並んでいる点が、車坂第1遺跡で円形間仕切住居の5号住居が直径約10mと突出している点、方形プランの1号住居～4号住居が南北方向に縦に並んでいる点と良く似ている。この両遺跡は時期的にもほぼ同じであり、瀬戸内の特徴のある土器を出土しているのが、共に方形プランであることも類似する。

山下第1遺跡では、方形プランの中にも大小の差があり、特に3.6m×2.4mと小型の1号住居は中央部に明らかな赤変部があり、火を焚いていたと判断される。これを炊事棟として考え、他の住居にも居住用、作業用等の機能分化を想定したいが、実証できるような遺物は検出されていない。むしろ、炊事場を共有する家族単位の集まりで、血縁関係を基礎とする集落と考えるべきであろうか。今後の資料の増加を待ちたい。

### 3. 古墳時代以降

古墳時代以降の時期となると、車坂城が車坂第1遺跡の東側に出現するまでの間の遺構は検出されておらず、弥生時代後期後半の車坂第3遺跡の方形間仕切住居を最後としている。このことは丘陵北側に、古墳時代前期からの住居群が出現し、後期古墳と言われる木花古墳群が丘陵北の微高地に造られる事とは、対照的である。

宮崎市内で初めて環濠集落が検出された、市内跡江地区にある国指定史跡生日古墳群周辺遺跡の調査では、弥生時代中期中葉に独立丘陵の枝台地部分にV字の環濠を巡らせて集落の独立性を更に高めていたものが、弥生時代の終末期には環濠は埋まってしまい、集落自体も台地から姿を消してしまう。それに取って替わる形で、100mを越す前方後円墳を3基含む生日古墳群が丘陵上に形成される。

古墳出現までの木花、生日両地区を比べると、共に中期中頃に丘陵上に集落を形成し終末頃まで継続する事は同様であるが、環濠を持たない事、古墳時代以降も丘陵上に集落が存続する事、丘陵上に古墳が造られない事等に明らかな相違が見られる。これらの相違は遺跡の周辺地形の相違、受容文化の違い、集落形成過程の違い等が原因と考えられるが、これらの解明が今後の大きな課題として残されている。

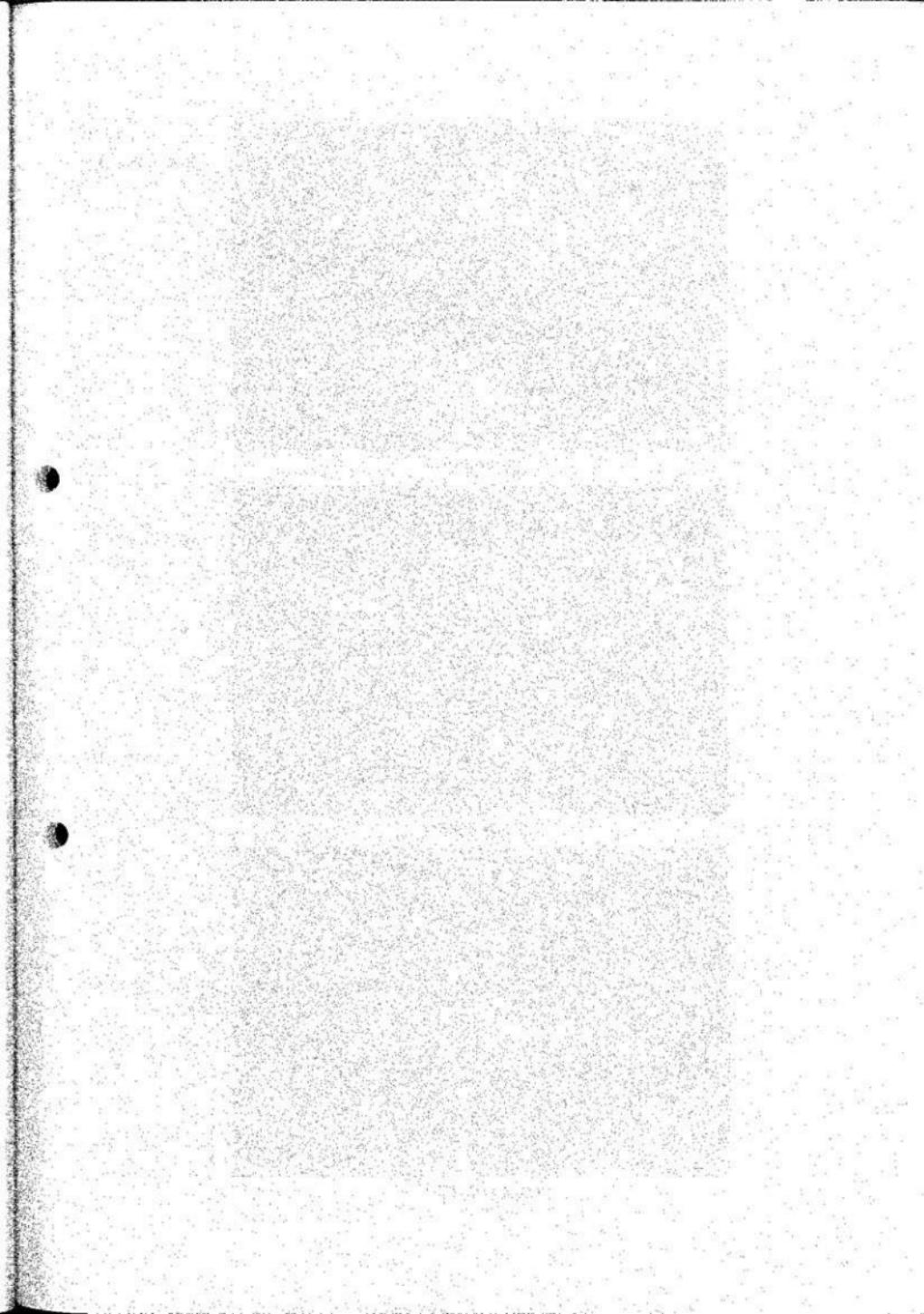
車坂・山下遺跡群の調査は、6年の期間と広い面積を発掘し、宮崎学園都市遺跡群の調査と併せると丘陵を掘り尽くす形になったにも拘らず、自分の調査の甘さと知識の無さで、学園都市遺跡群の調査に比べ何一つ新たに判明させたものの無い調査にしてしまった。

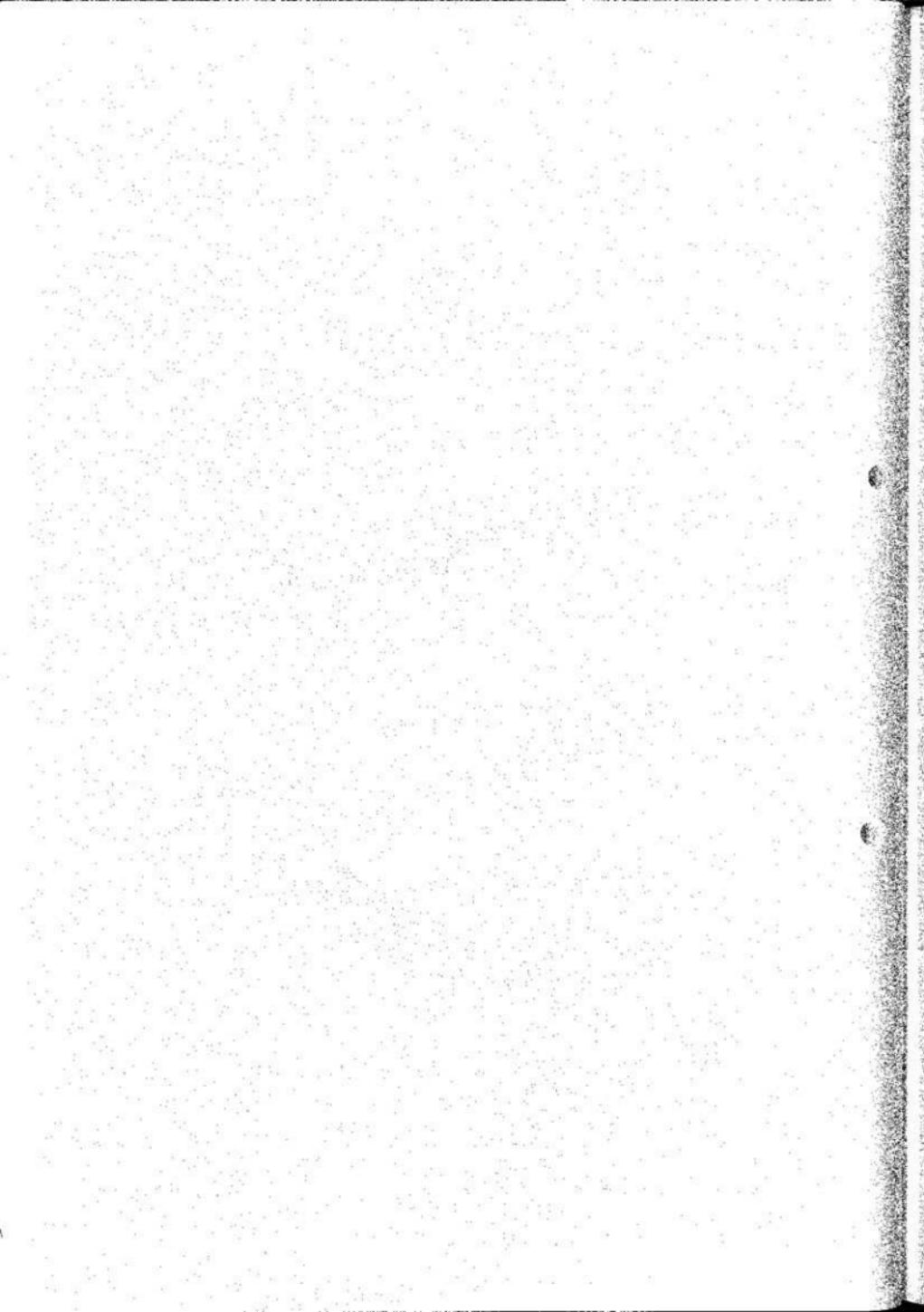
今は、自分の能力の無さと適性の無さをつくづくと感じており、発掘調査に対して諂ひすら覚えている次第である。

〔参考文献〕

宮崎県史 資料編 考古 1	宮崎県史刊行会	1989
宮崎県史 資料編 考古 2	宮崎県史刊行会	1994
宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集	宮崎県教育委員会	1985
宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集	宮崎県教育委員会	1988
一般国道218号椎畠バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	宮崎県教育委員会	1995
田野町文化財調査報告書 第3集	田野町教育委員会	1986
田野町文化財調査報告書 第12集	田野町教育委員会	1992
高岡町埋蔵文化財調査報告書 第9集	高岡町教育委員会	1996
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)	大分県教育委員会	1996
縄文土器大観 1	小学館	1989







図版 1

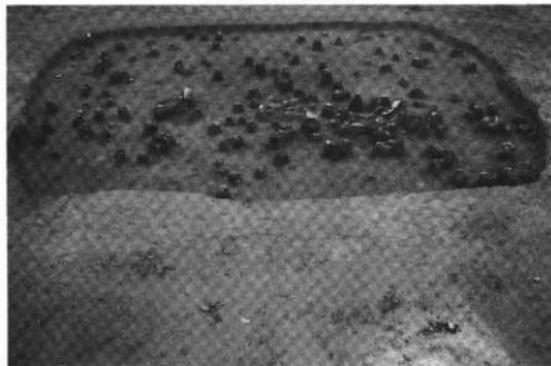
車坂第 1 遺跡 1



N 1 出土状況



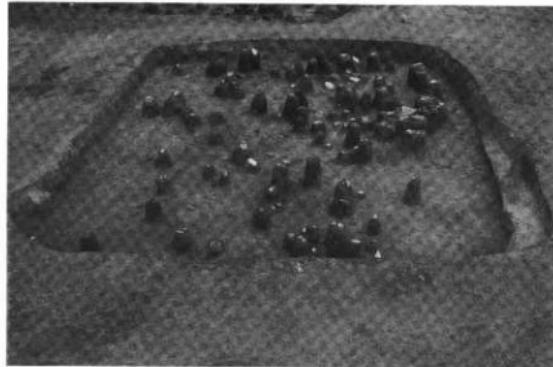
1 区遺構検出状況



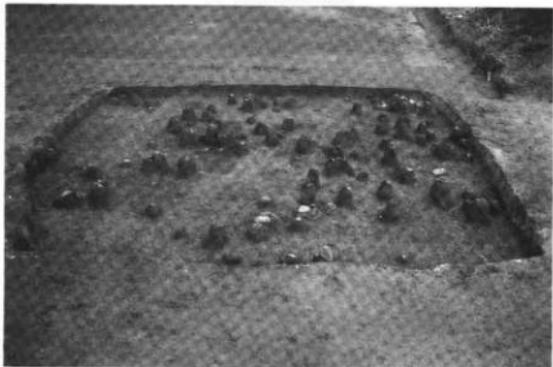
1 号住居出土状況

図版 2

車坂第 1 遺跡 2



2号住居出土状況



3号住居出土状況



4号住居出土状況

図版 3

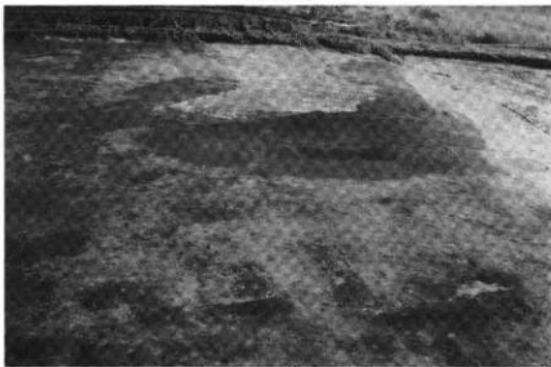
車坂第1遺跡3



遺構水没状況



作業風景



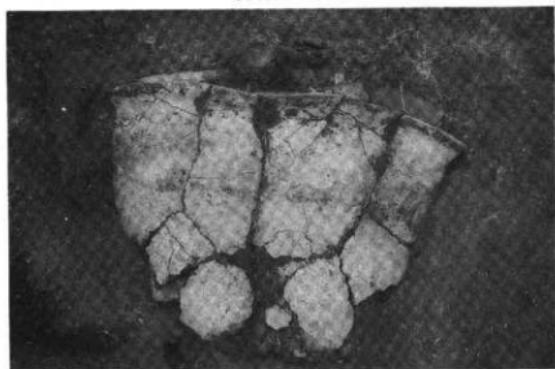
2区遺構検出状況

図版 4

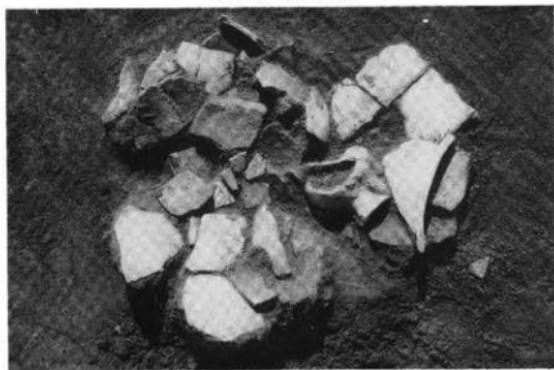
車坂第 1 遺跡 4



5号住居出土状況



5号住居出土状況



5号住居出土状況

図版 5

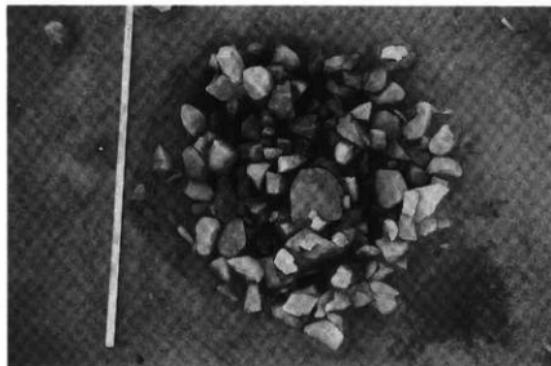
車坂第 1 遺跡 5



集石検出状況



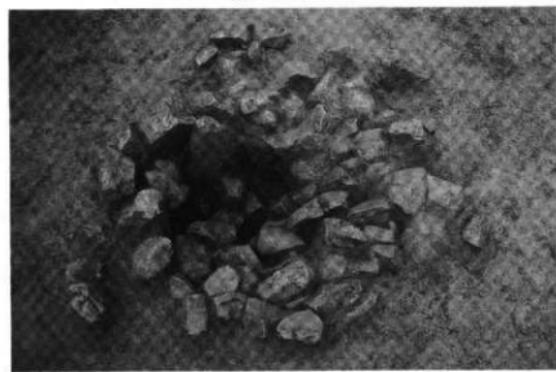
集石検出状況



集石検出状況



集石半裁状況



集石検出状況



集石半裁状況

図版 7

車坂第1遺跡 7



2号土坑出土状況



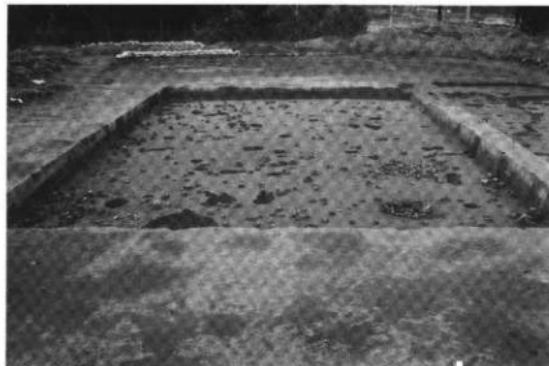
S1出土状況



S2出土状況

図版 8

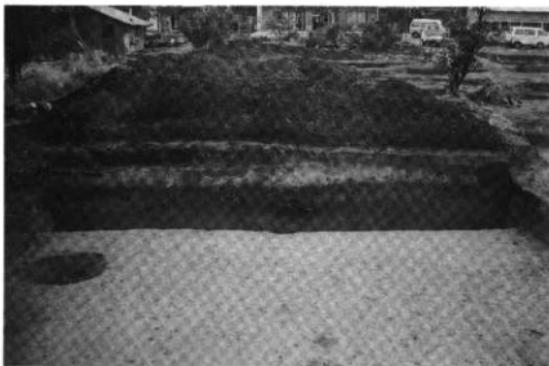
車坂第1遺跡 8



S 3 出土状況

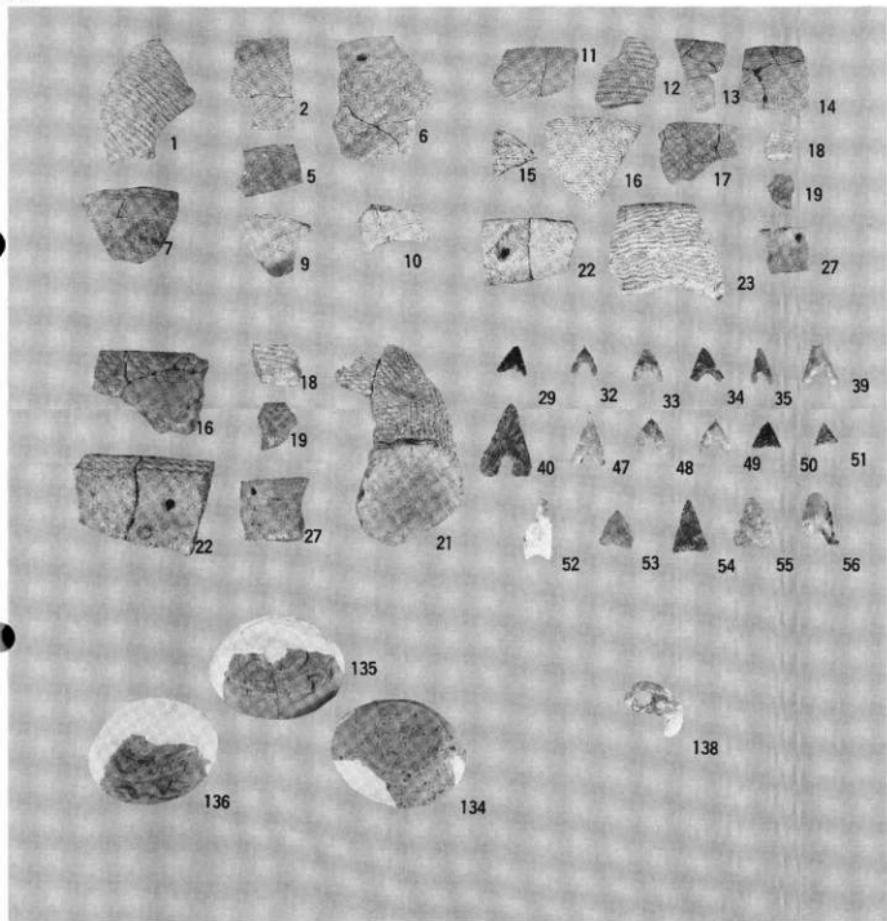


S 4 出土状況

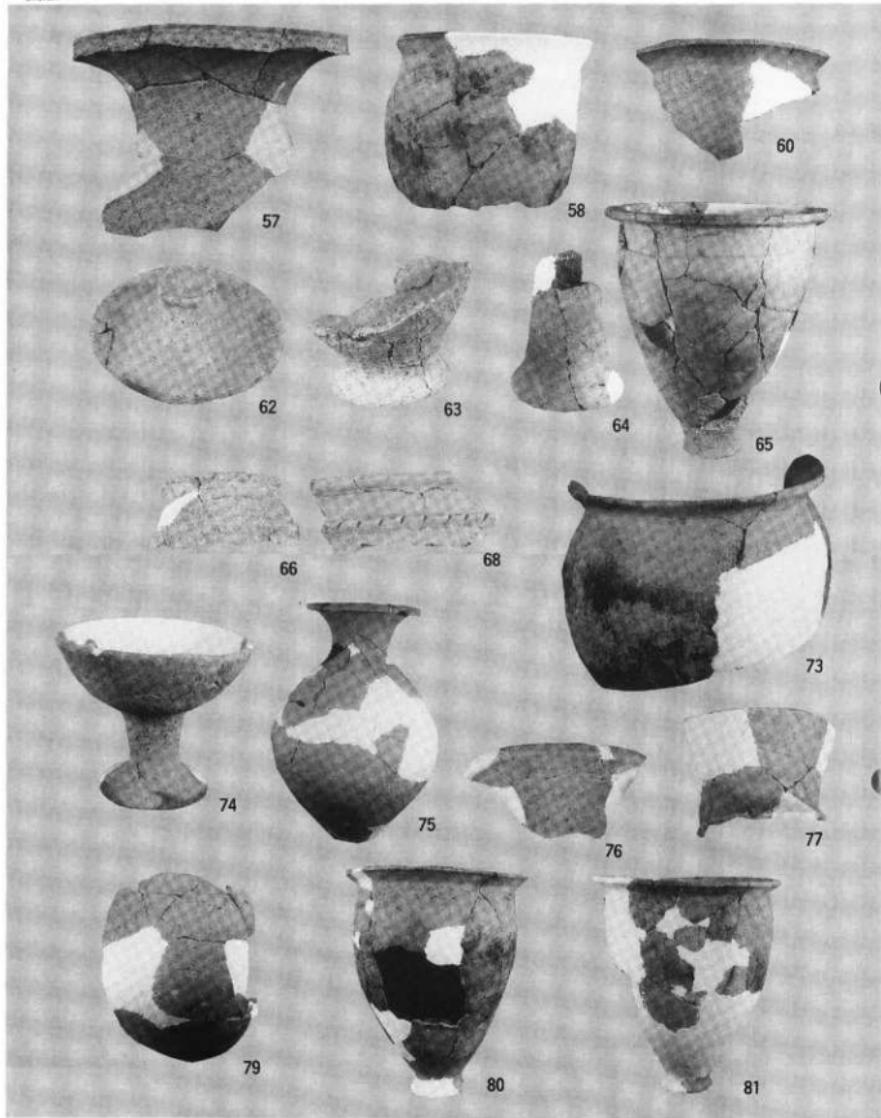


土 層

図版 9

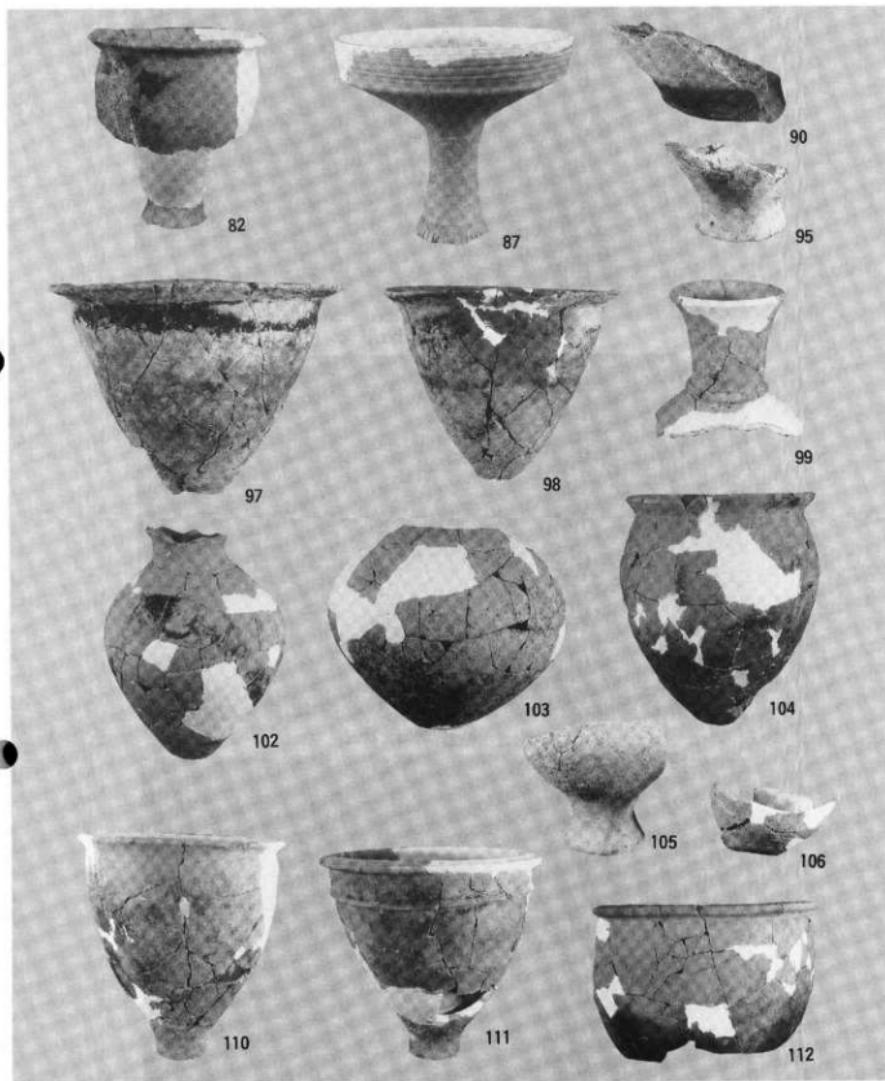


車坂第1遺跡出土遺物



車坂第1遺跡出土土器1

図版11



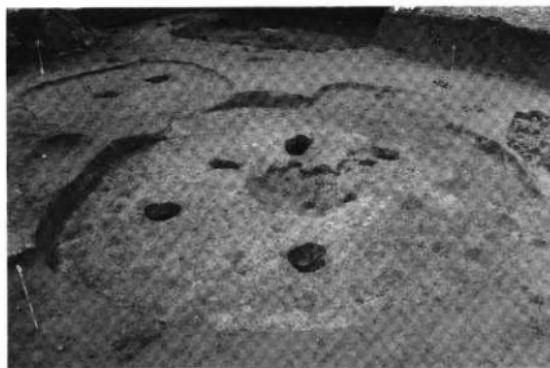
車坂第1遺跡出土土器2

図版12

車坂第2遺跡1



1号住居出土状況



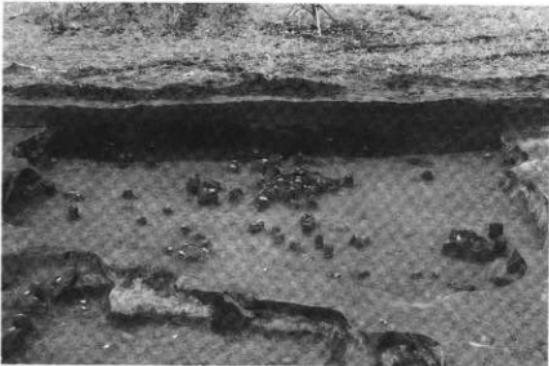
2号住居出土状況



3・4号住居

圖版13

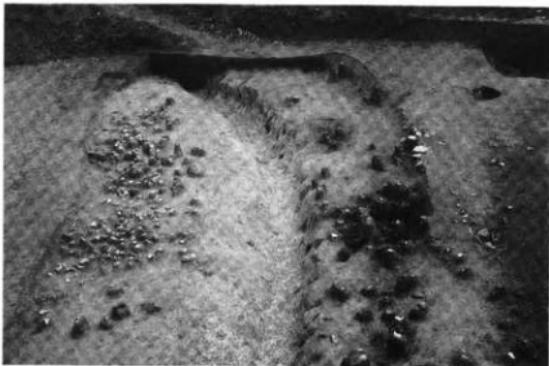
車板第2遺跡2



3号住居出土狀況



4号住居出土狀況



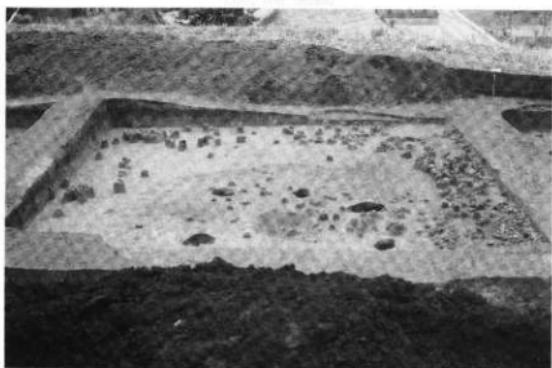
溝状遺構出土狀況

図版14

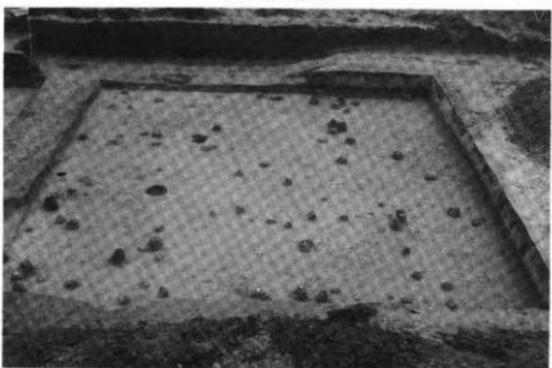
車板第2遺跡3



N1 出土状況



S1 出土状況



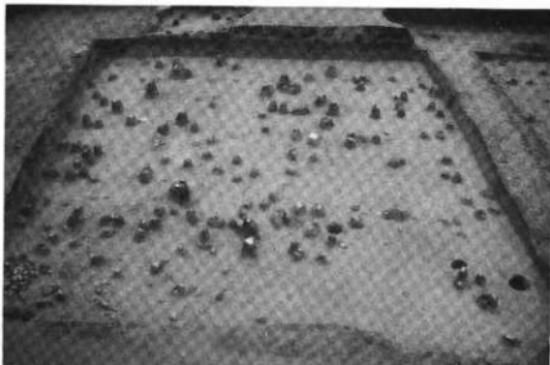
N2 出土状況

圖版15

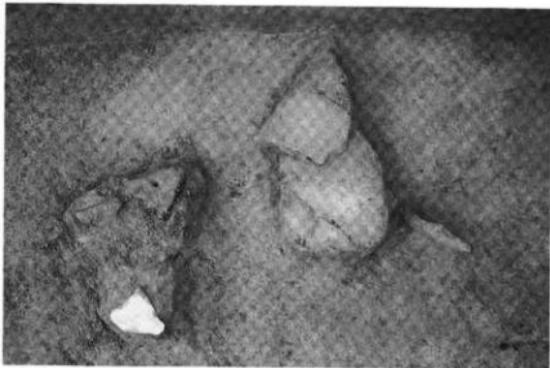
車板第2遺跡4



S 2 出土狀況



N 3 出土狀況



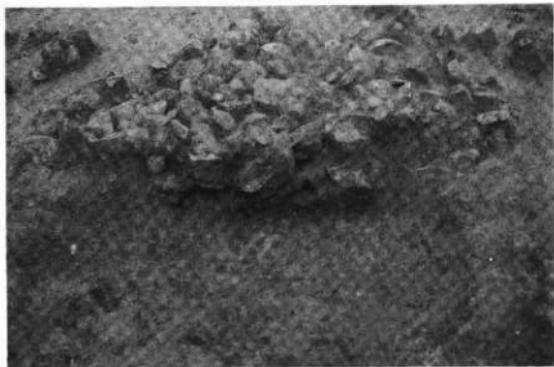
土器出土狀況

図版16

車坂第2遺跡5



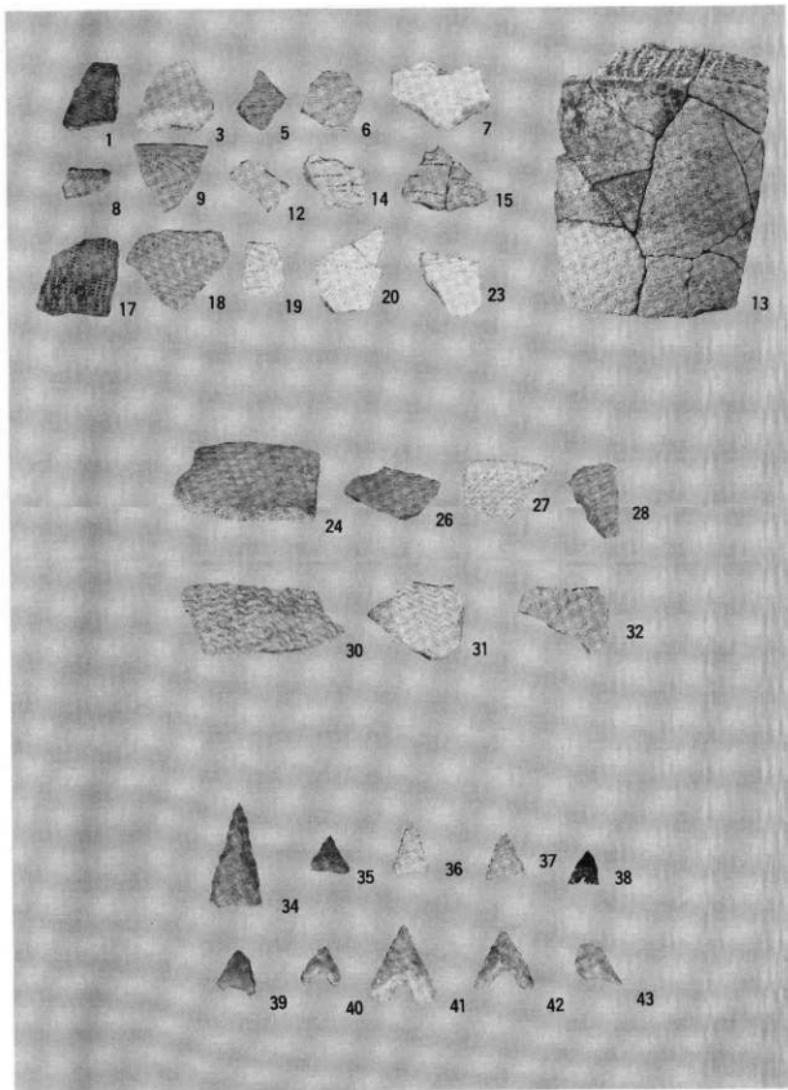
集石検出状況



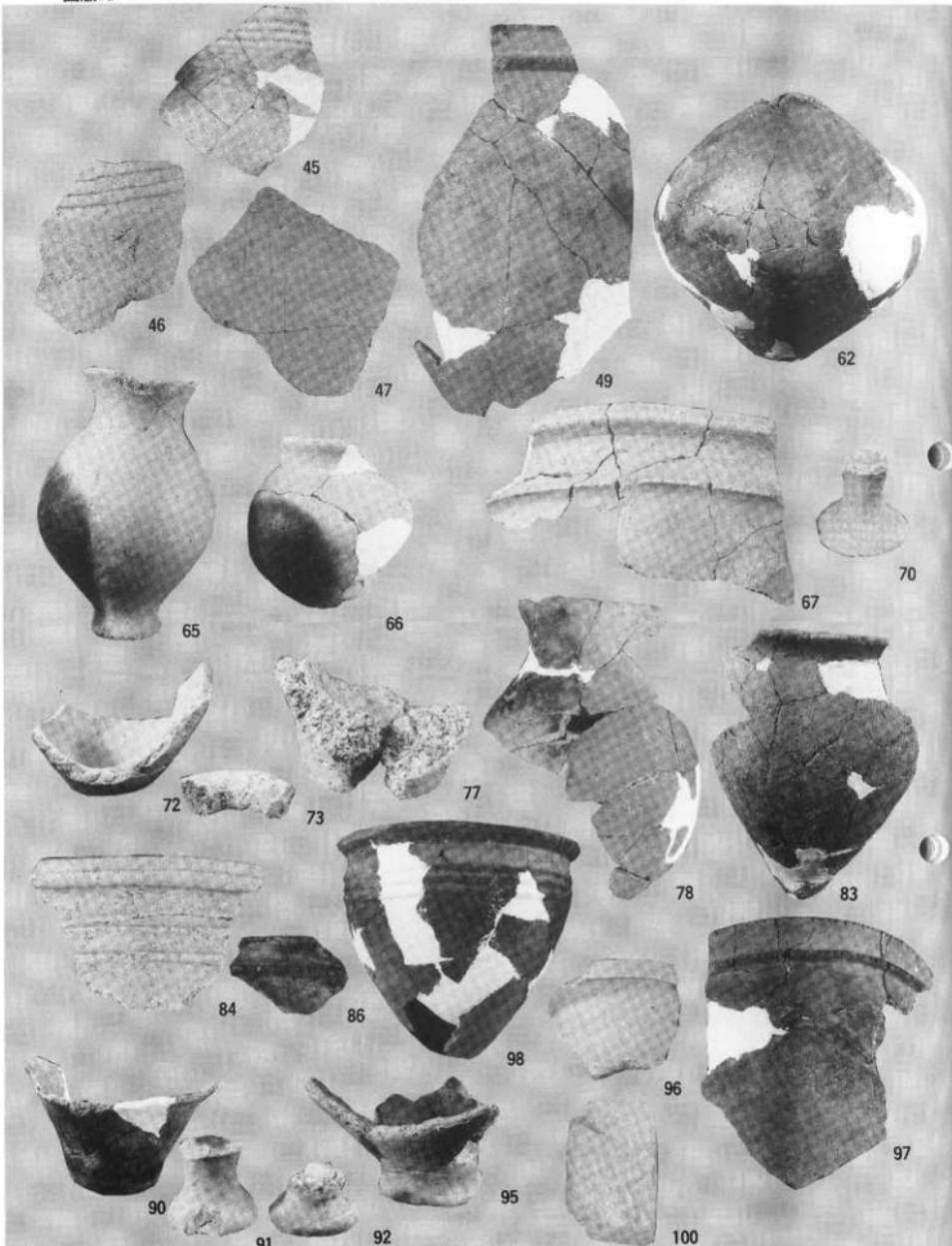
集石半裁状況



作業風景



車坂第2遺跡出土遺物1



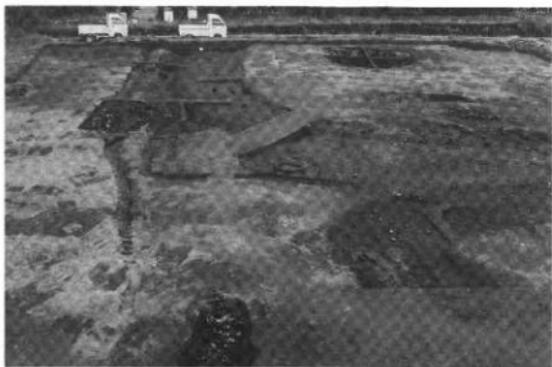
車坂第2遺跡出土遺物2

図版19

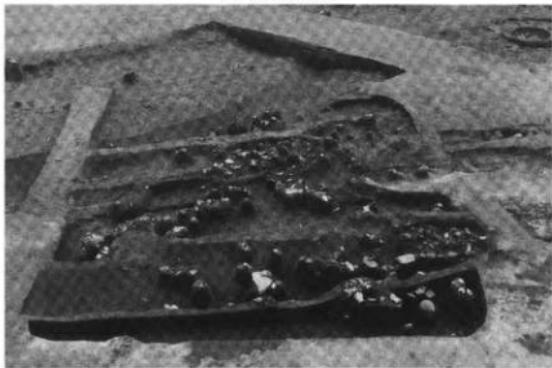
車坂第3遺跡1



1区遺構検出状況



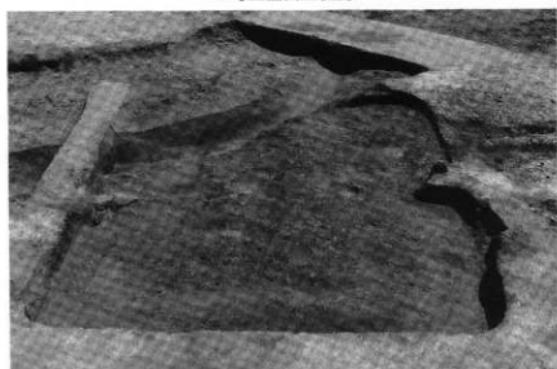
1区溝状遺構他



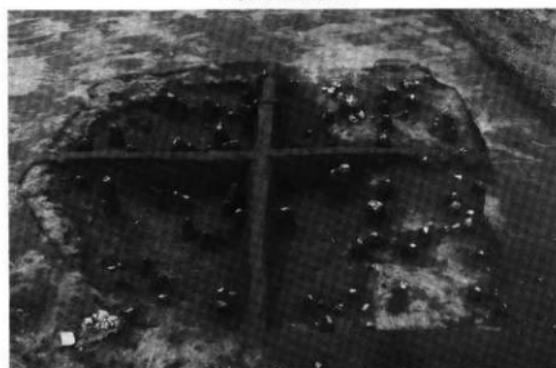
1号住居切合い



1号土器出土状況



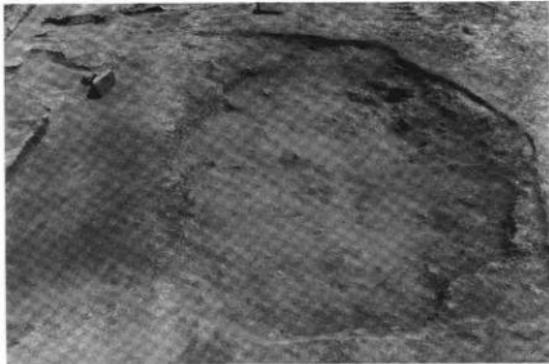
1号住居発掘状況



2号竖穴状遺構

図版21

車坂第3遺跡3



2号竪穴状遺構完掘状況



1号土坑出土状況



1号土坑出土状況